松崎宿北構口・南構口

小郡市文化財調査報告書第218集

2007

小郡市教育委員会

松崎宿北構口・南構口

—福岡県小郡市松崎所在構口の調査報告書—

小郡市文化財調査報告書第218集

2007

小郡市教育委員会

①松崎宿北構口全景（東から）

②松崎宿南構口全景（南から）

序　　文

松崎宿は、17世紀につくられた薩摩街道沿いの宿場町です。時代の流れの中で、姿・形を変えて行くのが町並みの宿命ではありますが、ここ松崎宿には18世紀に建築されたと考えられる大型旅籠建築油屋など、かつての面影を残す建物群が今も存在しています。

今回報告する松崎宿北構口・南構口は、宿場町の南北の門にあたる遺構で、17世紀後半の宿場町成立に合わせて築造されたと考えられる重要な史跡です。両構口計４ヶ所の石垣が現存する例は全国的にも極めて稀と考えられます。今回の発掘調査では、その内部構造から建築技術の一端まで多くのことが明らかとなりました。その成果は、将来の整備に向けて十分生かしていきたいと思います。

調査にあたりましては、地権者の三原明夫氏、柳静子氏をはじめ、山田茂氏、柳亨氏など多くの方々にご理解とご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

平成19年３月31日

小郡市教育委員会
教育長　清　武　　輝

例　　言

１．本書は、小郡市松崎に所在する小郡市指定史跡松崎宿北構口及び小郡市指定史跡松崎宿南構口の内容確認調査の報告書である。調査は将来的な整備を目的とし、国庫補助・県費補助（市内遺跡等）を受け実施した。
２．両構口の石垣部の実測や地形測量等は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託して実施し、遺構内部の実測等は調査担当者（山崎・杉本）が実施した。
３．調査にあたっては、小郡市文化財専門委員の小田富士雄氏（福岡大学名誉教授）をはじめ、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館館長）、小林勇作氏・立石真二氏（筑後市教育委員会）など多くの方々にご指導いただいた。
４．調査中の遺構の写真は、山崎・杉本が撮影した。また、全景写真は、(有)文化財写真工房に委託した。
５．遺構の測量・実測及び遺物の復元・実測・製図には、担当者の他に柿本慈、馬田妙子、田中悠美子、百嶋八千代、衛藤知嘉子、佐々木智子、斉田美帆、津田由美子、角野朋子の諸氏に多大なる協力を得た。
６．遺物の写真は、(有)文化財写真工房に委託した。
７．遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土調査法第Ⅱ座標系に則っている。
８．遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
９．本書の執筆は以下のとおりである。
　第１章　山崎・杉本
　第２章　杉本
　第３章　山崎
　第４章　杉本
　第５章　山崎・杉本

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と組織 ……1
（１）北構口の調査 ……1
（２）南構口の調査 ……1
第２章　位置と環境 ……2
第３章　松崎宿北構口の調査 ……3
（１）調査の概要～北溝口の周辺～ ……3
（２）北構口の現状 ……5
（３）石垣基底部確認調査 ……7
（４）石垣内部構造確認調査 ……8
（５）出土遺物 ……11
第４章　松崎宿南構口の調査 ……14
（１）調査の概要 ……14
（２）南構口の現状 ……14
（３）石垣部の調査 ……18
（４）土塁部の調査 ……23
第５章　調査の成果 ……29
（１）北構口 ……29
（２）南構口 ……29

挿 図 目 次

第１図　松崎宿関連文化財分布図（S=１/10,000）……2
第２図　北構口地形測量図及びトレンチ配置図（S=１/200）……4
第３図　北構口北側石垣実測図（S=1/50）……5
第４図　北構口南側石垣実測図（S=1/50）……6
第５図　北構口石垣基底部実測図（S=1/40）……7
第６図　北構口石垣内部土層断面図（S=1/40）……9
第７図　北構口石垣内部平面図（S=1/40）……10
第８図　北構口出土遺物実測図（1～4・6・7はS=1/3、5・8～11はS=1/4、12～14はS=1/6、15～19はS=1/8、20～24はS=1/2）……12
第９図　南構口地形測量図（上）及びトレンチ配置図（下）（S=1/200）……15
第10図　南構口東側石垣実測図（S=1/50）……16
第11図　南構口西側石垣実測図（S=1/50）……17
第12図　南構口Ｔｒ１実測図（S=1/30）……19
第13図　南構口Ｔｒ１土層断面実測図（S=1/30）……20
第14図　南構口Ｔｒ１出土磁器実測図（S=1/3）……21
第15図　南構口Ｔｒ１出土陶器・土師質土器等実測図（18・19・21～24はS=1/3、その他はS=1/4）……22
第16図　南構口Ｔｒ２実測図（S=1/30）……24
第17図　南構口Ｔｒ３実測図（S=1/30）……24
第18図　南構口Ｔｒ４実測図（S=1/30）……25
第19図　南構口Ｔｒ２～Ｔｒ４出土遺物実測図（1・2・11・15・16はS=1/4、その他はS=1/3）……26
第20図　南構口出土瓦・古銭・石臼実測図（1～3はS=1/3、4はS=1/2、5はS=1/5）……27

表 目 次

表１　松崎宿北構口出土遺物観察表 ……13
表２　松崎宿南構口出土遺物観察表 ……28

図　版　目　次

巻頭図版　①松崎宿北構口全景（東から）
②松崎宿南構口全景（南から）
図版１（北構口）①石垣内部検出状況（西から）
②石垣内部断ち割り状況（南から）
図版２（北構口）①石垣東面基底部北（東から）
②石垣東面基底部南（東から）
③石垣西面基底部（北西から）
④石垣西面基底部詳細（北西から）
図版３（北構口）①石垣内部検出状況（西から）
②石垣内部断割土層断面（東から）
③石垣内部断ち割り土層断面詳細①（東から）
④石垣内部断ち割り土層断面詳細②（東から）
図版４（北構口）①石垣内部盛土状況①（南東から）
②石垣内部盛土状況②（南から）
③現地説明会風景①
④現地説明会風景②
図版５（北構口）北溝口出土遺物①
図版６（北構口）北溝口出土遺物②
図版７（南構口）①構口（街道西側）全景（北西から）
②石垣内部完掘状況（西から）
図版８（南構口）①構口（街道西側）石垣現状（南から）
②構口（街道西側）全景（北東から）
③構口（街道西側）全景（西から）
④完掘状況（北東から）
図版９（南構口）①Ｔｒ１上層瓦類出土状況（西から）
②Ｔｒ１完掘状況（西から）
③Ｔｒ１南壁土層堆積状況１（北から）
④Ｔｒ１南壁土層堆積状況２（北から）
図版10（南構口）①Ｔｒ１東壁土層堆積状況（西から）
②Ｔｒ１石敷き層・裏込石等検出状況（北から）
③Ｔｒ１石垣部基礎石掘り方検出状況（南西から）
④Ｔｒ１石垣南西端部確認状況（南西から）
図版11（南構口）①Ｔｒ２完掘状況（南から）
②Ｔｒ２土層堆積状況（南から）
③Ｔｒ３完掘状況（南から）
④Ｔｒ３南側段落ち部検出状況（南東から）
図版12（南構口）①Ｔｒ４完掘状況（南から）
②Ｔｒ４土層堆積状況（東から）
③Ｔｒ４土層堆積状況（北東から）
④Ｔｒ４土層堆積状況（南東から）
図版13（南構口）南溝口出土遺物①
図版14（南構口）南溝口出土遺物②

第１章　調査の経緯と組織

松崎宿は、薩摩街道筋における久留米藩（有馬氏）領内「三宿」（松崎宿・府中宿・羽犬塚宿）の一つとして栄えた宿場町である。小郡市教育委員会では、宿場内に残る江戸時代の大型旅籠建築「旧松崎旅籠油屋」（市指定建造物）を中心とした整備を計画しているが、その一翼を担うのが「北構口」「南構口」（ともに市指定史跡）の存在である。各２ヶ所計４基の石垣がいずれも残存している例は全国的に見ても希少で、南構口には土塁も一部残存している。小郡市教育委員会では、平成12年度より国庫補助事業として、確認調査を実施してきた。調査の概要は以下の通りである。

平成12年度　南北構口測量調査（周辺地形測量・石垣部実測）
平成15年度　構口１次調査（北構口内部構造・規模の確認）
平成17年度　構口２次調査（南構口石垣・土塁の内部構造・規模の確認）
平成18年度　構口３次調査（南構口石垣内部構造の補足調査）、調査報告書の作成

（１）北構口の調査

北構口の規模構造確認調査は平成15年度に行い、平成18年度に報告書作成を行う。

＜調査の経過＞

平成15年9月3日、調査開始、トレンチ設定。4日、石垣東面基底部確認。5日、１トレ攪乱層除去。8日、１トレ拡張、福岡女学院大学小宮芳幸氏の研修受入開始。9日、石垣内上層礫の検出。大きく３層の盛土を確認。10日、福岡大学小田先生現地指導。11日、記者発表。15日、現地説明会（13日の予定が台風により日程変更）。16日から一部断割調査。25日から実測作業。9月30日、調査終了。

＜調査の体制＞

小郡市教育委員会
　教育長　秋山幸子（H15）清武輝（H18）
　教育部長　高木良郎

文化財課長　小野太郎（H15）　田篭千代太（H18）
文化財係長　大石義行（H15）
　技師係長　片岡宏二（H18は文化財係長）
　技師　　山崎頼人（調査担当）

（２）南構口の調査

南構口の内容確認調査は、平成17年度と平成18年度の２ヵ年に渡って実施した。

＜１次調査の経過＞

平成17年10月11日、調査前の測量調査を行う（土塁部）。12日、トレンチを設定し、掘削開始。Tr１上層より、大量の瓦類が出土。17日、個別遺構実測開始。18日、土塁部分のトレンチ（Ｔｒ４）掘削開始。21日、石垣部（Ｔｒ１）下層の石敷きを検出。22日、現地説明会を開催。25日、遺構実測終了。28日、トレンチの埋め戻し。終了後、道具撤収。

＜２次調査の経過＞

平成18年10月2日、調査開始。トレンチ設定。3日、遺構掘削開始。6日、個別遺構の実測開始。10日、全景写真撮影（委託）。石垣裏込石を検出。17日、敷石部の陶器・瓦類を取り上げる。埋め戻し開始。18日、埋め戻し終了。道具撤収。

＜調査の体制＞

小郡市教育委員会
　教育長　　清武輝
　教育部長　高木良郎

文化財課長　田篭千代太
文化財係長　大石義行（H17）
技師係長　　片岡宏二（H17、H18は文化財係長）
技師　　杉本岳史（調査担当）

第２章　位置と環境

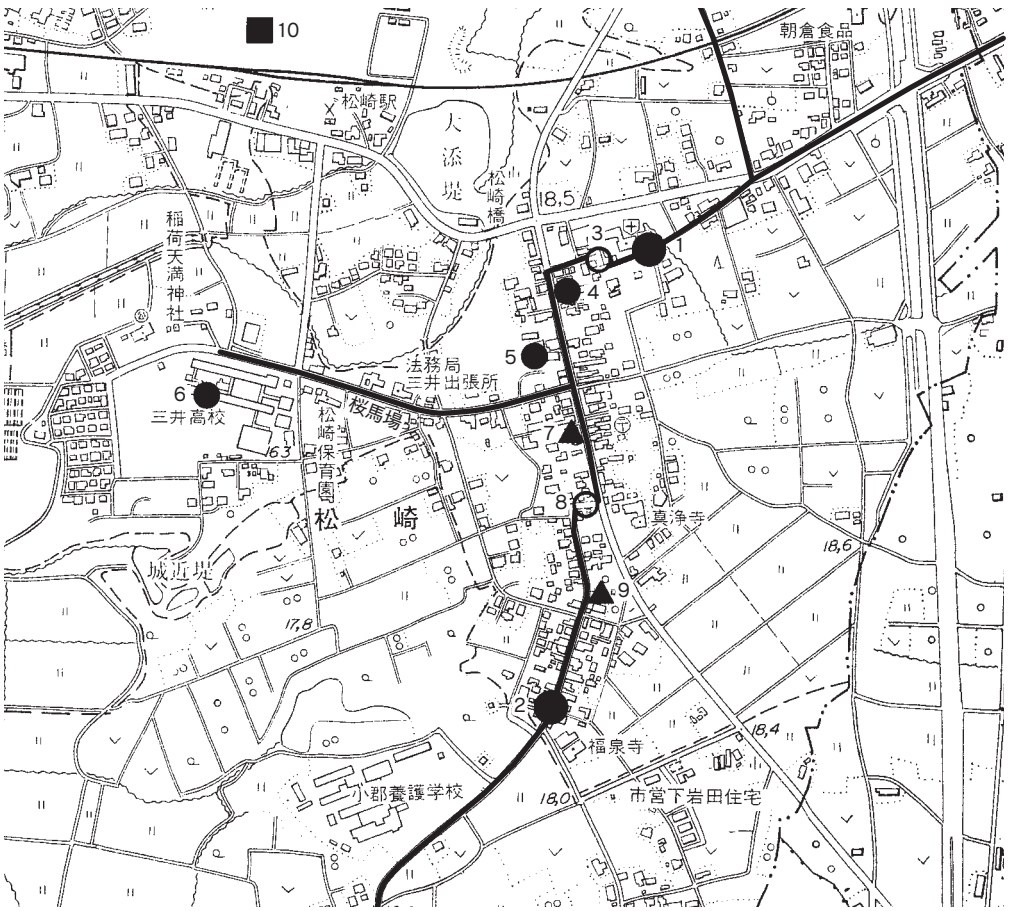
松崎宿は、現在の小郡市松崎に位置し、市中央部を南流する宝満川の東岸台地上に立地する。周辺には上岩田遺跡や下高橋官衙遺跡などが存在し、古代を中心とした遺跡が数多く分布している。

松崎宿の成立は、寛文８年(1669)に有馬豊範が御原郡35ヶ村の内19ヶ村１万石（松崎藩）を分知されたことによる。豊範は松崎を宿場町として整備し、延宝６年(1678)にはそれまでの横隈往還を廃し、松崎宿を通る薩摩街道が天下道として定められた。なお、豊範は貞享元年(1684)年に改易処分を受け、松崎藩は短命に終わるが、松崎宿はその後も発展を続け、幕末には宿場内に129軒が存在したことが確認されている（うち26軒が旅籠、６軒が煮売り屋）。

往時の松崎宿の内容は、これまでの様々な調査により徐々に明らかになってきた。現存する建物や遺構は、北側から、北構口・北枡形・旅籠油屋・本陣跡・南桝形・南構口である。なお、街道沿いには多くの恵比寿像が建立されており、宿場町の性格を良く表している。本陣跡から約400ｍ西には松崎城（館）が存在したと考えられ（現.福岡県立三井高等学校）、宿場とは桜馬場で結ばれている。

松崎宿に現存する建物の中で欠かすことができないのが、旅籠油屋である。非常に規模の大きな旅籠建築であり、主屋とは別に賓客を遇する式台玄関を持つ離れ（座敷）を備えている。建築時期は18世紀後半と考えられ、当時の看板や陶磁器類等、数多くの貴重な資料が残されている。旅籠建築としては、時期は下るがその他にも一松屋・鶴小屋等が現存している。

松崎宿では、他の宿場町と同様、近年の建物の建て替え・改変が多く見られるが、江戸時代当時の面影を残す貴重な文化財が数多く存在している重要な地域であると言えよう。



1．北構口
2．南構口
3．北枡形
4．旅籠油屋
5．本陣跡
6．松崎城跡
7．旅籠一松屋
8．南桝形
9．旅籠鶴小屋
10．上岩田遺跡

第１図　松崎宿関連文化財分布図（S＝１/10,000）

第３章　松崎宿北構口の調査

（１）調査の概要　～北構口の周辺～　（第１・２図）

構口は街道に面した宿場出入り口に付設されるという構造性格的な宿命により、近現代の道路整備や開発により、常に改変・破壊の危険に晒されてきた。特に街道筋は現在まで引き続き、交通幹線となることが多いため、それに伴い、改変・破壊が行われ、現存する構口（見附）も非常に少ない。全国の宿場町にみられた様々な構造の構口であるが、現在でも、「北構口」・「南構口」の２箇所、計４基の石垣が現存している松崎宿は、貴重な文化的景観を保持している（第１図、巻頭カラー図版）。

現在の当地域における東西の交通幹線、国道500号線のひとつ内道に入った部分に北構口が現存している。松崎宿は幹線から少し外れたために、枡形という当時の道路構造や地割を残している点でも重要である（第１図）。

北構口は北の枡形に近接しており（距離60ｍ）、番所小屋や木戸が存在したという口承も含めて、松崎宿の治安維持・防御・警備の拠点であることがうかがわれる。また、構口の東側20ｍを南北に走る小流路も当時からほぼ同じ位置を流れており、一定の防御性を持っている。木戸については流路の手前にあったと伝えられ、木戸の根石となるような石がその付近でみられたといわれる。番所小屋は北石垣の方にあったといわれている。以上のように、久留米藩領に入る際の最初の宿場といった性格が強く反映されているのが、北構口周辺の状況でもよくわかる。

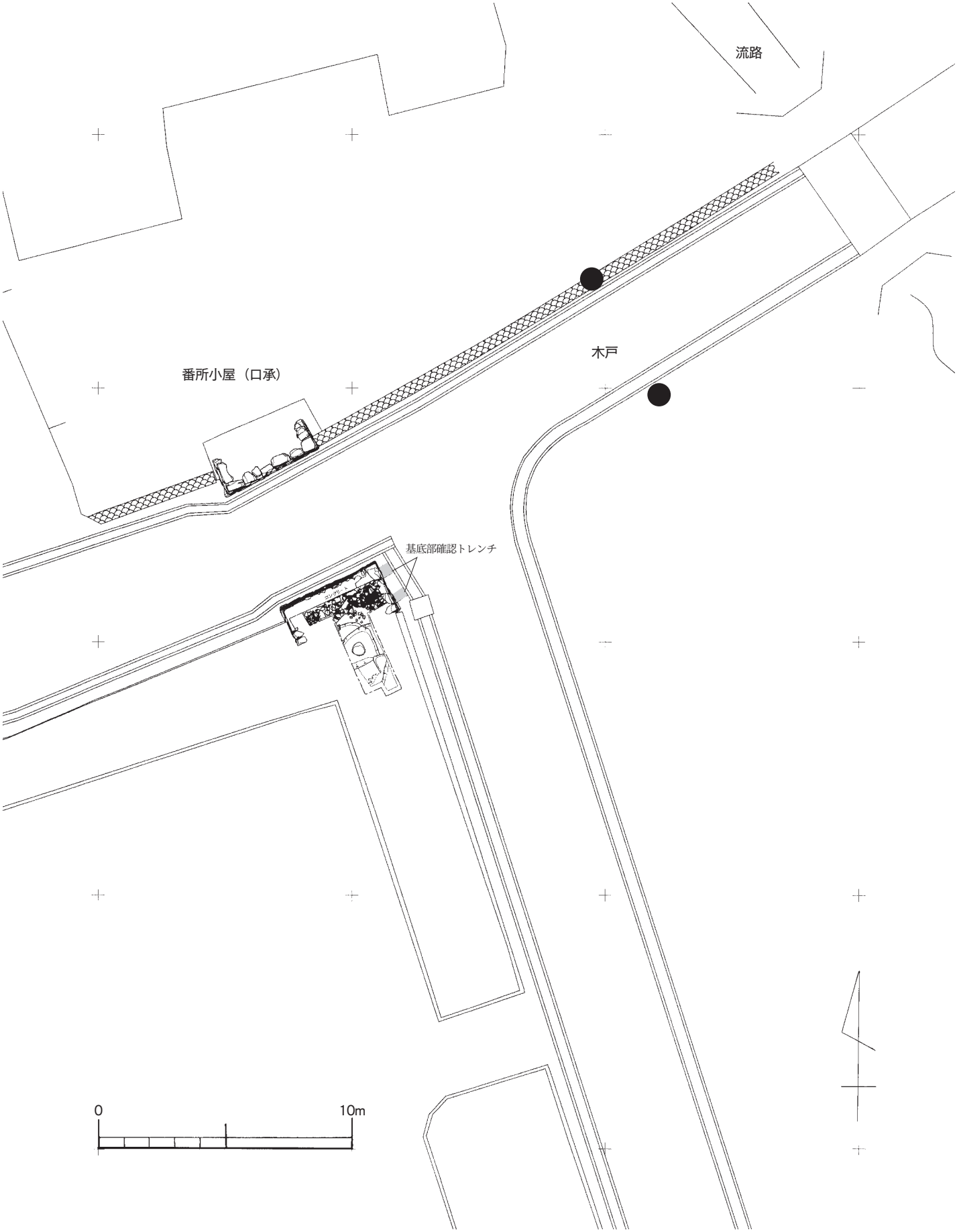
北構口は現状では石垣部が残存しているのみである（第２～４図）。街道北側では家屋のブロック塀が石垣部を避けて付設され、街道南側は松崎児童公園の一部になっており、石垣に面を合わせる形で、公園を囲む低い擁壁が付設されている（第２図）。東面の石垣南端の法面が若干あわないことや、南構口の現況と比べても奥行き側の石垣が1.55ｍの残存で短く、一部改変を受けていることは明らかである。また、石垣の高さについても南構口よりも石垣が１段ほど低い状況があり、上段は抜き取られている可能性が考えられ、検討すべき課題となっている。

以上のことから、石垣上の構造物の有無や構造物の性格を示す痕跡について、また、石垣には土壁が連なるとも想定されている（柳1976）ので、石垣後方の付属施設についても、調査で明らかにする必要があるが、現状の改変を考えると詳細に検討できる考古学的痕跡を得ることは難しいものと考えられた。そのため、北構口調査では、主に石垣部の規模確認、内部構造確認に主眼をおくことにした。

街道に面した部分の石垣幅は約２間（4.2ｍ）で規模が明らかであるが、今回は奥行きについての規模確認を第一に検討し、次に石垣がどのように築かれたのかを内部構造から明らかにするのが目的である。残存状況の良い南構口との規模比較、また、継続して行われる南構口調査の調査指針ともなっている。

北側石垣はブロック塀が近接しており、また、奥行き調査についてはブロック塀をはさみ、連続した土層確認ができないため、南側石垣を調査対象とした。

トレンチは当初、奥行きを確かめるための南北トレンチ、そこから東西に現状の石垣が切れるところまでの間に東・西トレンチを設定した。調査を進めるなかで、南北トレンチは大きな撹乱坑や分厚い現代の遺物を包含する盛土層（１～1.2ｍ）が存在したので、トレンチ幅を拡げて調査を進めた（第２図）。撹乱層以下には一部生きている層が確認でき、南側へ続いている状況がみられたため、可能な限りトレンチを南方向へ拡張した。石垣内部にあたる東・西トレンチは現表土層を一枚剥ぐと、こぶし大の礫や瓦を充填した裏込めが現れたので、石垣内部全域の表土を掘削し、それらの層を検出した。これらを「石垣内部構造確認調査」とし、報告する。



第２図　北構口地形測量図及びトレンチ配置図（S=1/200）

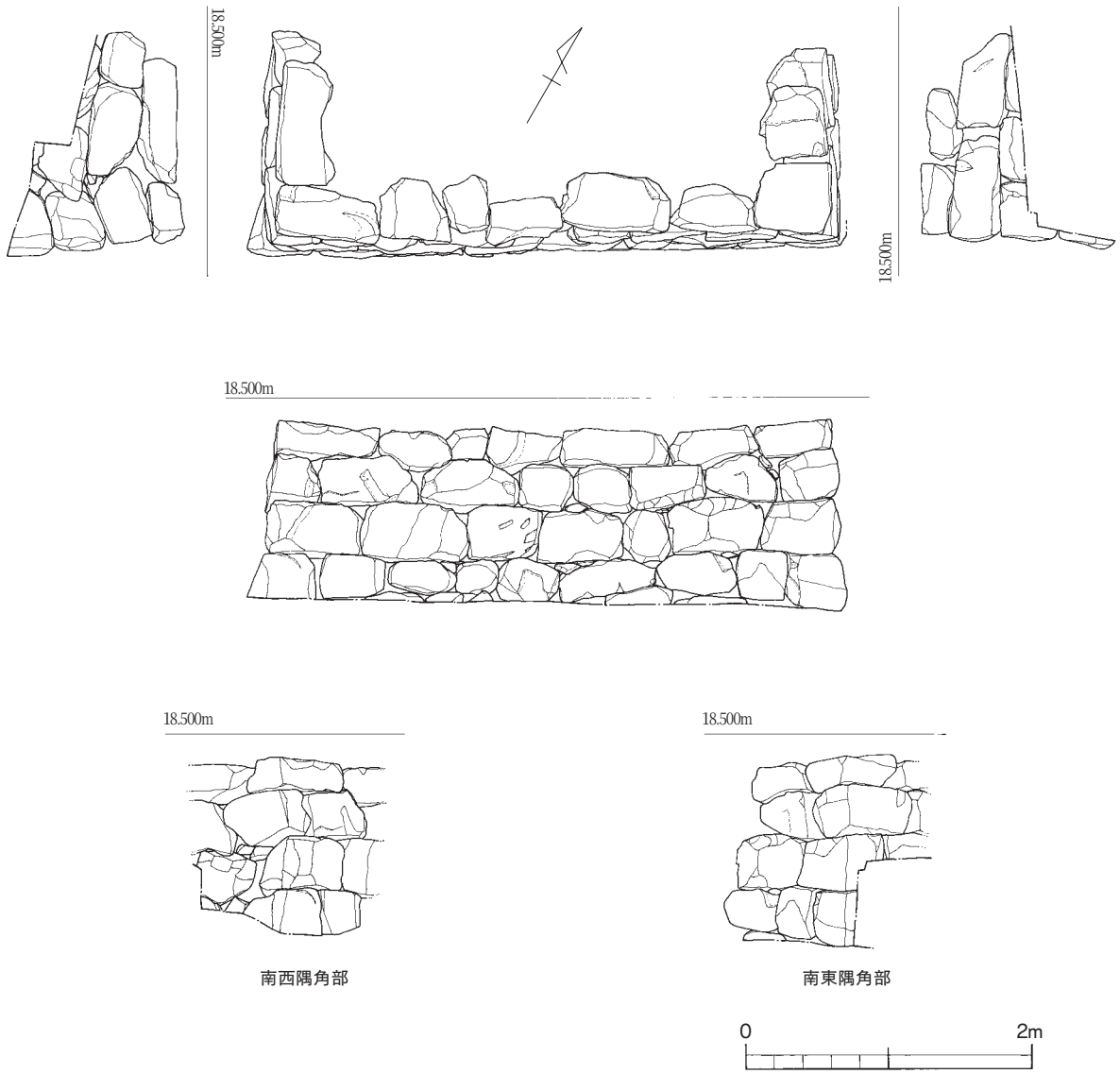
また、石垣外部でも３箇所の小トレンチを設定した。１箇所については撹乱を大きく受けていることから、掘削は現表土を除いたところで止め、のこり２箇所の掘り下げを行った（第２図）。これらを「石垣基底部確認調査」とし、報告する。

（２）北構口の現状

A. 街道北側（第３図、巻頭図版１）

現在の地表面より、おおよそ４段の石垣が残存している。角の取れた立方体や直方体状の花崗岩を用いた野面布積である。角度を待たず、ほぼ垂直方向に石積みされる。南側の石垣に比べて、石と石との隙間が目立つ状況にある。現状の最上段は上面があまり揃っておらず、おそらく、あと１段程度の石列が存在したことが想定される。一部現在の地表面付近にも石列が顔を出していることから、地表面下にも石列が存在することは明らかである。ただ、北側石垣基底部の掘削調査は行っておらず、根石等の状況は不明である。

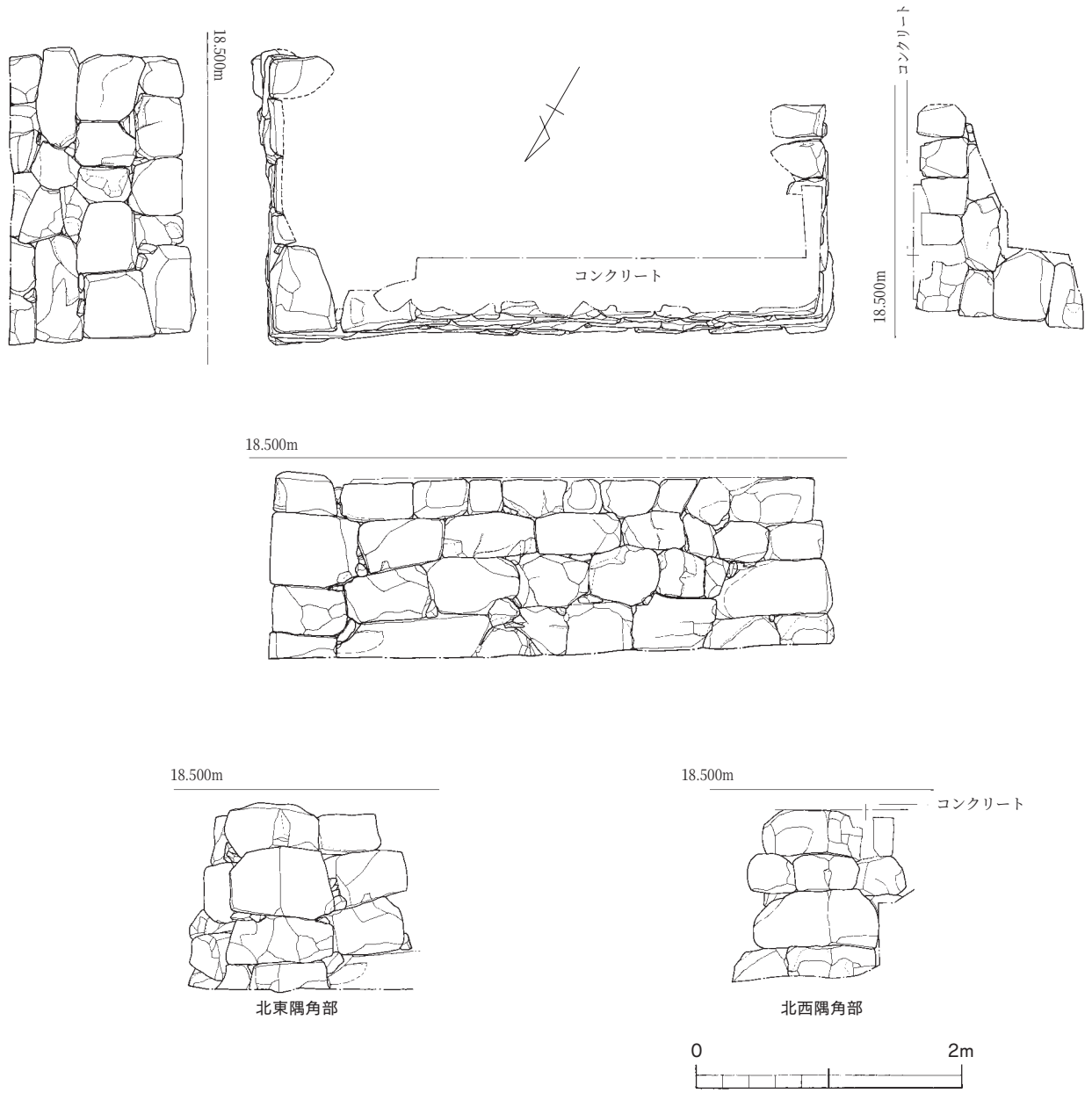
石垣の現状規模は、街道に面する部分（南辺）で4.25mを測る。東辺・西辺は現状で、東辺1.5m、西辺1.54mを確認できる。高さは1.24mを測るが、当時の地表面を考慮すれば1.54m以上となる。



第３図　北構口北側石垣実測図（S=1/50）

B. 街道南側（第４図、巻頭図版１）

南側の石垣は街道に面する石列の最上段に、児童公園の特性上、安全のためにコンクリートがうたれ、養生されている。現在の地表面より、４段の石垣が残存している。角の取れた立方体や直方体状の花崗岩を用いた野面布積である。角度を待たず、ほぼ垂直方向に石積みされる。北側の石垣に比べて、石と石との隙間に栗石等が充填されており、目がつまっている。全体的な印象として、北側のものよりも、それぞれの石列の面がきれいに揃っている感を受ける。現状の最上段に関しても上面が非常に揃っている。北側石垣の状況や南構口の状況を考えると、あと１段程度の石列が存在したことが想定される。南側では現地表面以下の石垣の状況を把握するために、トレンチを２箇所入れ、根石を確認している。当時の地表面は現在の地表面から30cm程度下がったところと想定される。石垣の現状規模は、街道に面する部分（北辺）で4.３ｍを測る。東辺・西辺は現状で、東辺2.22ｍ、西辺1.7ｍ確認できる。高さは1.4ｍを測るが、当時の地表面を考慮すれば1.7ｍ以上の高さがあったことになる。



第４図　北構口南側石垣実測図（S=1/50）

（3）石垣基底部確認調査（第２・５図、図版２）

当時の地表面、および根石等の確認のために、石垣外側にトレンチを入れ、掘り下げを行った。なお、石垣と道路が接する部分には、U字溝が設置されており、石垣とU字溝の間に若干の空間がある石垣南面側に２箇所のトレンチ（約40cm四方）を設定した（第２図）。

現在地表面で確認できる最下部の石が北側トレンチで現地表面下16cm、南側トレンチで24cmまで確認できる（第５図）。それ以下にも、北側ではあと１段の大形直方体状の花崗岩、南側では隅丸方形状の花崗岩が確認できる。その大形石以下にはそれを支えるやや不整形な花崗岩礫や楔状に入れた花崗岩礫などがみられる。最下底部では、黄褐色粘土の地山が標高16.４ｍでみられる。地山直上には黒褐色シルト質の土層（若干黄褐色粘土ブロック２㎜以下含む）が花崗岩礫の間で確認できる。

以上のことから、根石設置の工程は以下のように復原できる。

① 標高16.4ｍまで地山の掘り込みを行う。

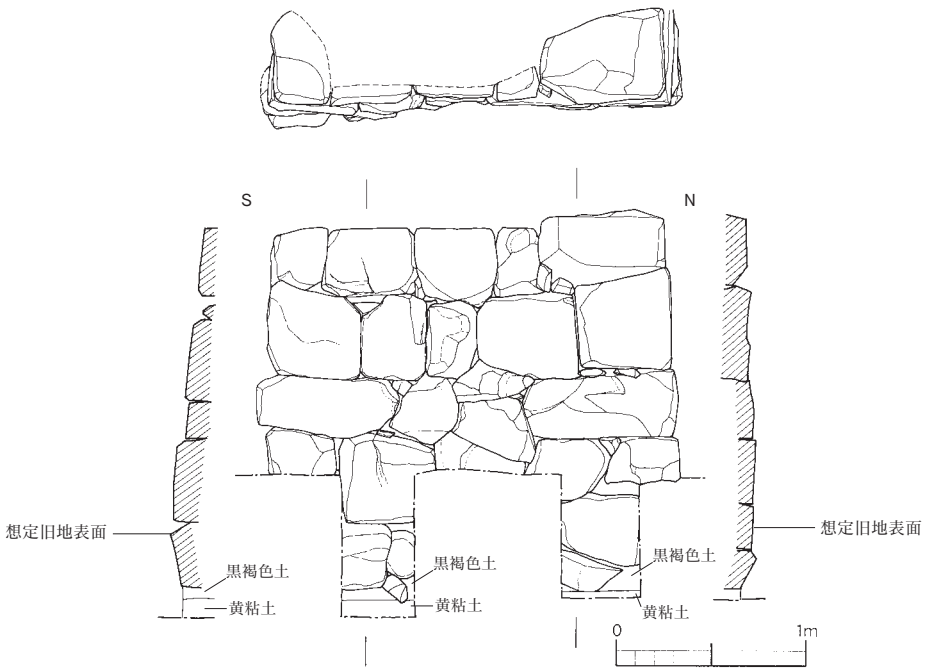
② 小・中形の花崗岩礫を、根石を据える際に、良く座るように充填する。併せて、黒褐色土の充填も行われている。

③ 根石を設置する。

なお、トレンチが石垣外側にあるため、地山成形後の裏込めの処置等は石垣内部構造確認トレンチの項で詳述する。

また、根石設置の状況から当時の地表面は、現地表面下30cmほどであると想定したい。

今回のトレンチ調査では、周辺U字溝までの空間の限られた掘削範囲であるので、根石・花崗岩礫以下に胴木状の基礎の設置があるのか否か、また、栗石等で基礎を固めているかなど、基礎施行の状況を明確に出来ていない。



第５図　北構口石垣基底部実測図（S=1/40）

（4）石垣内部構造確認調査（第２・６・７図、図版１・３・４）

トレンチは当初、奥行きを確かめるための南北トレンチ、そこから東西に現状の石垣が切れるところまでの間に東・西トレンチを設定した。調査を進めるなかで、南北トレンチは大きな撹乱坑や分厚い現代の遺物を包含する盛土層（１～1.2m）が存在したので、トレンチ幅を拡げて調査を進めた。撹乱層以下には一部生きている層が確認でき、南側へ続いている状況がみられたため、可能な限りトレンチを南方向へ拡張した。石垣内部にあたる東・西トレンチは現表土層を一枚剥ぐと、こぶし大の礫や瓦を充填した裏込めが現れたので、石垣内部全域の表土を掘削し、それらの層を検出した。

当トレンチ調査を実施するにあたり、主眼を置いたのは以下の点である。

① 現状の石垣では後世の改変により明らかでない、奥行き規模を確認する。

② 石垣に取り付く後方構造物を復原できる情報を得る。

③ 石垣の構築方法を復原できる情報を得る。

調査の結果、②については、公園に植樹された桜並木があり、これ以上トレンチを南側へ拡張できないことから、有効な遺構情報を得ることが出来なかった（第２図）。

以下、①と③について得られた遺構情報を中心に報告する。

石垣部の表土を１枚剥いだところ、長辺が60cm程ある花崗岩からこぶし大の礫を中心とし、そのほか石臼片や瓦、陶磁器小片が充填された層が検出された（第６図）。花崗岩にはいくつか種類があり、花崗斑岩や石英斑岩、流紋斑岩なども含まれる。石垣部は、石垣裏込め上部層と考えられるその層を検出したところで、掘削を止めている。

石垣の奥行きを確かめるための南北トレンチは、大きな撹乱坑や層厚１～1.2mの現児童公園造成に伴うと思われる土手状の盛土が存在し、現代の改変が大きく及んでいることが明らかになった。調査はトレンチ幅を拡げ、まず撹乱層の除去を進めた。

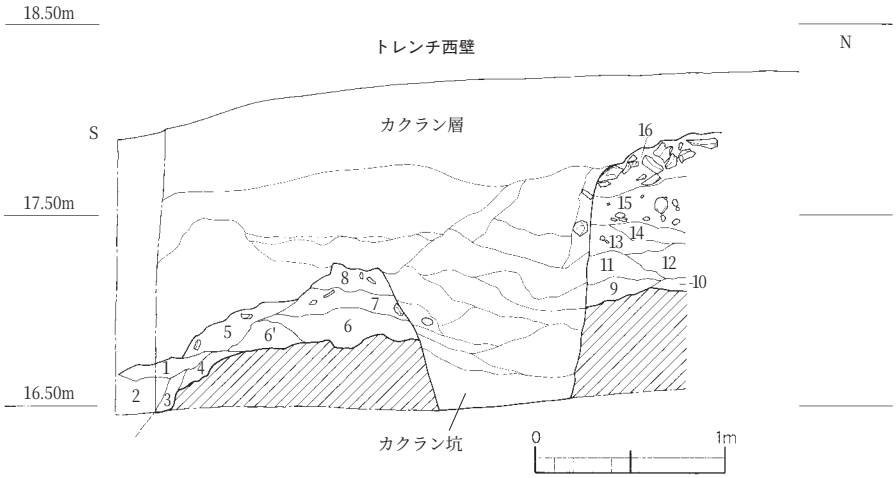
トレンチ中ほどでみられた撹乱坑は地山以下50cmまで達しており、そのほかにも多数の撹乱坑がみられ、調査区東壁では、南側でかろうじて、石垣内部の裏込土が残っている状況が確認できた（第６・７図）。

撹乱層を除去した段階で、大略石垣裏込めの状況は明らかになったので記録をとった。その後、石垣から続く北側の裏込土、および南側の裏込土の状況を確実に押さえるために、トレンチ東側を地山以下まで掘削し、土層の観察を行った。

それにより、石垣内部の裏込めの状況が明確になった。下層では黄灰色系のシルト土を基調とした土層が何層かにわけて盛土されている。中層では特に１～３cm大の小石を多く含む堅固なにぶい黄シルト層があり、上層では長辺が60cm程ある花崗岩からこぶし大の礫を中心とし、そのほか石臼片や瓦、陶磁器小片が充填されたにぶい黄褐色土層がみられる。以上のように石垣内部の裏込め土は大別３層に分けることが可能である。古墳墳丘構築や古代建物にともなう版築層と比べると非常に簡素化された構造であるといえる。

また、トレンチ南端では、旧表土が一部確認されており、それがやや北側が高い傾斜を持つことや地山のレベルに関しても南側と北側では30cm程の比高があり、北側が高くなっていることから、旧地形は、土層断面で確認できる以上に北側が高くなる状況があったと考えられる。その地形を石垣設置の際には、いくらか掘削し、整地したうえで石垣の構築を進めたことがわかる。

また、トレンチ南端では旧表土を切り込む層が一部確認できる。本調査では、北側の立ち上がりしか確認できていないが、おそらく、石垣設置に関連しての掘り込みであることが考えられる。



北構口石垣内部南北トレンチ
1．2.5Y8/6黄シルト90%+2.5Y4/2黄灰シルト10%（φ1mm以下砂粒少量)(よくしまる)
2．2.5Y4/1黄灰シルト （2.5Y8/6黄灰シルトブロック1cm大少量まじる)(しまる)
3．10YR2/1黒色シルト90%+2.5Y8/6黄灰シルト10%ブロック（1cm大少量まじる)(よくしまる)
4．〈旧表土〉10YR2/1黒色シルト
5．10YR4/2灰黄褐シルト80%+2.5Y8/6黄灰シルトブロック0.5cm大20%（よくしまる)
6．10YR4/2灰黄褐シルト（しまらない)
6'．10YR4/2灰黄褐シルト95%+2.5Y8/6黄灰シルトブロック0.5cm大5% （しまる)
7．10YR4/2灰黄褐シルト70%+2.5Y7/6明黄褐シルトブロック1～2cm大30%（礫含む、1mm砂粒含む炭化物ブロック0.5cm大含む)(よくしまる)
8．10YR4/2灰黄色褐シルト80%+2.5Y8/6黄灰シルトブロック0.5～1cm大20%（1～2mm砂粒含む、礫含む)(よくしまる)
9．10YR4/2灰黄褐シルト90%+2.5Y8/6黄灰シルトブロック0.5～1cm大10%（炭化物ブロック0.5cm大含む)(よくしまる)
10．2.5Y6/4にぶい黄シルト（しまらない)
11．9であまりしまらない
12．10YR4/2灰黄褐シルト60%+10YR2/1黒色シルト35%+2.5Y8/6黄灰シルトブロック0.2cm大5%（あまりしまらない)
13．12の灰黄褐40%黒60%1～2mm砂粒含（あまりしまらない)
14．12の灰黄褐60%黒40%1～2mm砂粒含（あまりしまらない)
15．2.5Y6/4にぶい黄シルト+1～3mm砂粒、1～3cm小礫を多く含む（ガチガチ)
16．10YR4/3にぶい黄褐土に大レキ・瓦などが多く入る

第６図　北構口石垣内部土層断面図（S=1/40）

出土遺物は、破片類で少ないが、①北側の石垣残存部で検出した上層裏込め直上層、②上層裏込めに伴うもの（16層上部対応)、③中層の確実な裏込め土に入っているもの（層中出土）（13～15層対応)、④南側の撹乱層以下の硬化した層（５層対応）の検出時に確認できたものにわけられる。

なお、出土遺物の項で詳述するが、①は明治以降の染付も出土していることから純粋な石垣内裏込め土ではない。②、および④についても、上層が後世の改変層であることもあり、多少なりともその影響を受けている可能性がある。また、④の遺物の所属時期についても、新しい様相をもつので、石垣構築後に何らかの改変を受けた可能性も考えておく必要がある。遺物の少ない中で、確実な石垣所属時期を示す遺物は③の土層断面確認時に断ち割りを入れ、中層の構築土中から出土したものに絞られる。

石垣基底部確認調査と石垣内部構造確認調査から、北構口南側石垣の構築方法を推定すると以下のようになる。

① 地山の一部成形

（旧地形の名残を残しているため、大規模な改変ではない）

② 石垣設置部分の（溝状）掘り込み（標高16.4m位まで）

③ 石垣の根石設置

（根石を据える際に、小・中形の花崗岩礫を根石下部に充填する。併せて、黒褐色土の充填も行う。）

④ 石垣の設置　＜第１段階＞

⑤ 裏込め土の充填　＜第１段階＞

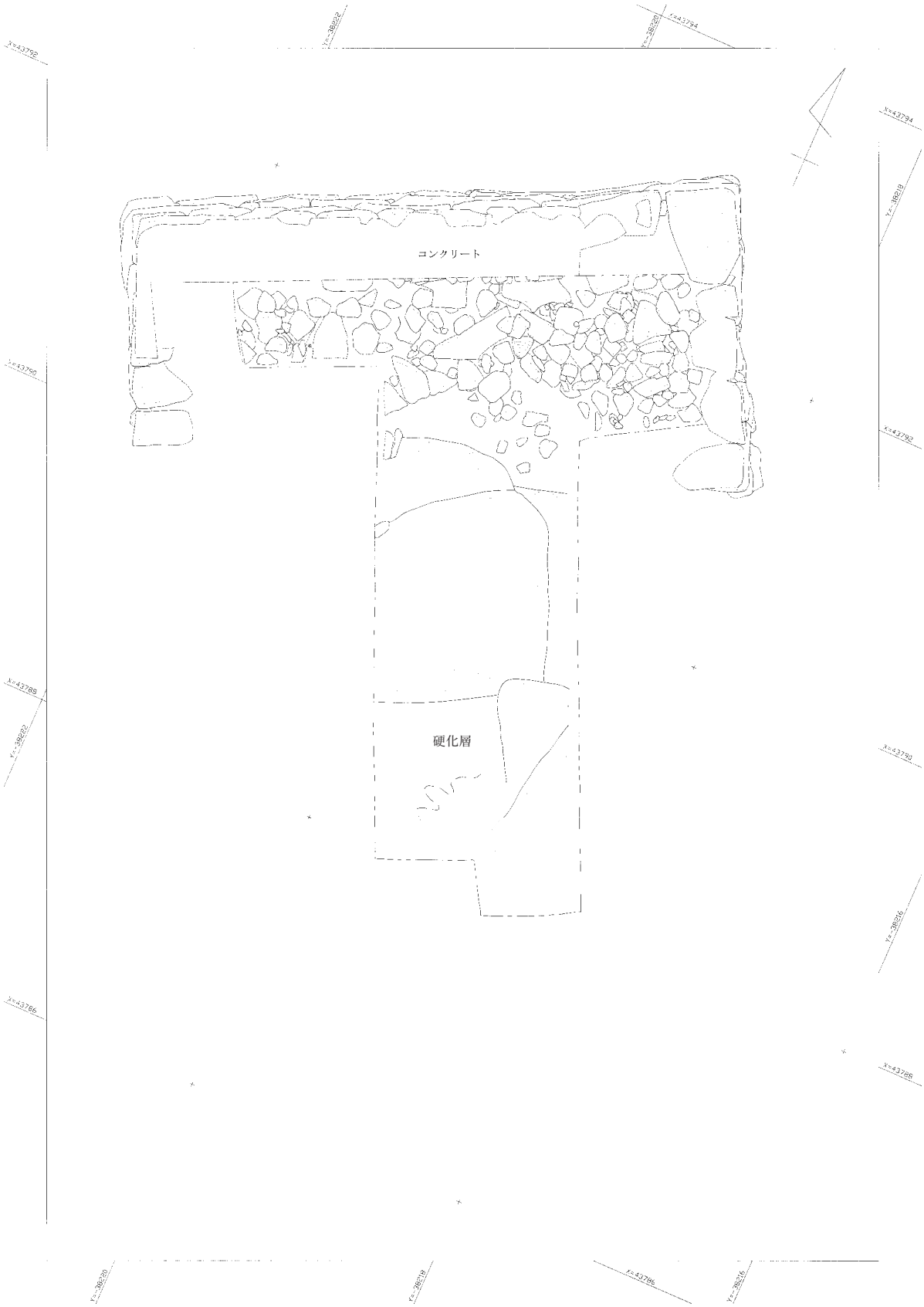
⑥ 石垣の設置　＜第２段階＞

⑦ 裏込め土の充填　＜第２段階＞

（⑧　石垣の設置　＜第３段階＞）

（⑨裏込め土の充填　＜第３段階＞）

（裏込め土は上・中・下層と大きく包含物の異なる３層が存在する。ただし、裏込め土上層は19世紀の改変層であるので、⑧⑨の工程が存在したかはわからない。）



第７図　北構口石垣内部平面図（S＝１/40）

（5）出土遺物（第８図、図版５・６）

先述の通り、出土遺物は破片類で少ないが、①北側の石垣残存部で検出した上層裏込め直上層出土のもの＜第８図１・２＞、②上層裏込めに伴うもの（16層上部対応）＜第８図３・８・16・18＞、③中層の確実な裏込め土に入っているもの（13～15層対応）＜第８図５・６＞、④南側の撹乱層以下の硬化した層（５層対応）の検出時に確認できたもの＜第８図４・７＞にわけられる。

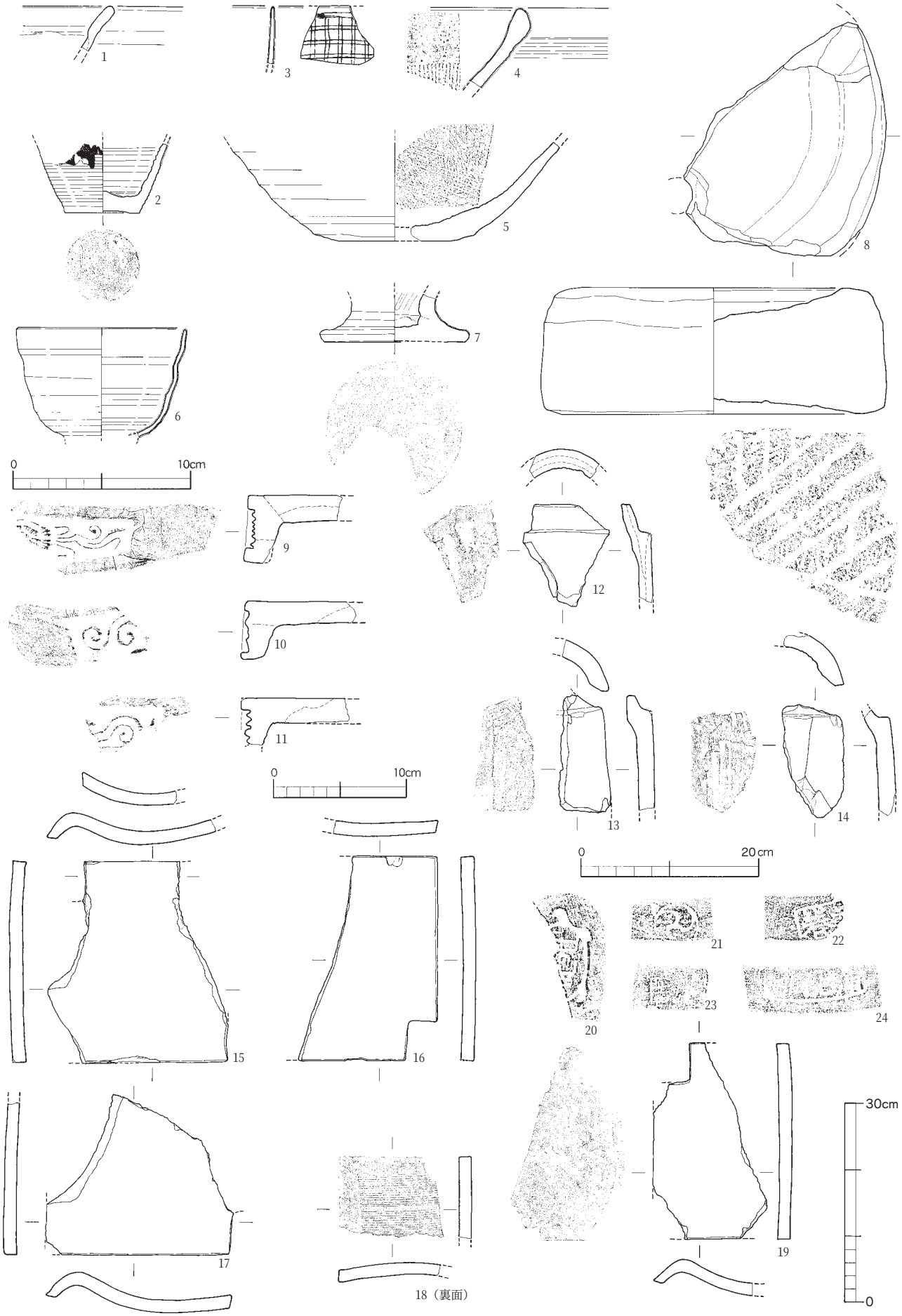
出土陶磁器類は小破片が多く、出土数も少ない。

１は陶器摺鉢口縁部である。裏込め土上層の直上層出土である。口縁端部は内側に少し肥厚させている。無釉である。17世紀後半の所産と考えられる。２は陶器中形瓶底部である。裏込め土上層の直上層出土のものである。底径は8.2cmである。ロクロ成形で底部は糸切り痕が残っている。上半には灰釉がみられ、深緑色に発色している。３は染付碗口縁部である。石垣部の裏込め土上層からの出土である。二重格子文が描かれる。19世紀の所産である。４は陶器摺鉢口縁部である。トレンチ南部の硬化面より出土したものである。口縁端部は外側に丸みをもって肥厚し、玉縁に近い形状である。全面施釉で褐釉である。19世紀の所産である。５は陶器摺鉢底部である。裏込め土中層内からの出土である。復原底径11.8cmである。底部は平底である。施釉はみられない。17世紀の所産と考えられる。６は陶器刷毛目椀口縁部である。裏込め土中層内からの出土である。復原口径9.6cmを測る。７は陶器灯火具脚部である。トレンチ南部硬化面より出土したものである。中空の脚で脚底径7.8cmである。脚底部は糸切り痕が残っている。外面に鉄釉を施す。

出土石製品には、８の石臼がある。石垣部の裏込め土上層からの出土である。挽き臼の上臼である。約１／６の残存である。中心の心棒受孔は残存しないが、供給口孔が確認できる。臼目は５～６㎜と幅広で、６分画の石臼である。現状ではふくみが大きい。石材は多孔質の安山岩である。

出土瓦類は、報告する以外にも、撹乱からの出土が多数みられた。それらの一部を報告しておく。

９～11は軒桟瓦である。９は菊花文を中心飾りにしており、紋様の中央にはしっかりとした稜が入る。明治以降の所産である。10は中心飾りが欠失している。末葉が上巻きのものと下巻きのものがみられる。太いなだらかな紋様表出である。11は中心飾りが欠失している。末葉が下巻きのものが確認できる。紋様の中央にはしっかりとした稜が入る。12～14は有段式の丸瓦である。12は玉縁が残っており、長さ3.3cmを測る。凹面はナデ調整されるが、紐状圧痕が残されている。13は凹面に目の粗い縄目状圧痕が残されている。14は凹面に縦方向に連続してヘラ掻きの痕がみられる。やや細い紐状圧痕が凹面玉縁面に残されている。15～17、19は平桟瓦である。18は裏込め土上層出土のものである。破片なので桟瓦になるか判断できない。凸面に一定間隔の粗いハケを有する。そのほか、19の凸面にも細かい、いろいろな方向を示すハケがみられる。16・17は下端面に刻印『助周池浦』がみられる。16は裏込め土上層出土のものである。刻印はその他の瓦でもみられる。20は凸面に粗い一定間隔のハケと亀をあしらった刻印がみられる。21は平桟瓦下端面に巴紋を刻印したものである。22は桟瓦下端面に『巻●』と刻印される。23は桟瓦下端面に『吉●』と刻印されている。24は先述の『助周池浦』の銘である。



第８図　北構口出土遺物実測図
（1～4・6・7はS=1/3、5・8～11はS=1/4、12～14はS=1/6、15～19はS=1/8、20～24はS=1/2）

表１　松崎宿北構口出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	種 類	器 種	法 量（cm）				形態・技法・文様等	色調・調整・胎土・焼成等	備 考
				口径	底径	器高	高台高			
1	8	陶器	摺鉢	－	－	－	－	口縁端部は内側に少し肥厚	口縁無釉 （土）精良　（色）10R4/2 灰赤色 堅緻	表土除去後裏込め上層検出まで 17世紀後半
2		陶器	中形瓶	－	8.2	－	－	ロクロ成形、底部糸切り	上半に灰釉（深緑色に発色） （土）精良　（色）5YR5/2 灰褐色 釉薬：7.5YR4/3 暗オリーブ色　堅緻	表土除去後裏込め土上層検出まで
3		磁器	染付碗	－	－	－	－	二重格子文	（土）精良　（色）外：N8/1 灰白色 内：N8/1 灰白色　良好	石垣裏込め土上層　19世紀
4		陶器	播鉢	－	－	－	－	口縁端部は外側に肥厚し、 玉縁に近い	褐釉 （土）2mm 以下の砂粒をやや多く含む　（色）釉薬の色：7.5YR4/4 褐色 土色：2.5Y6/1 黄灰色　良好	トレンチ南部硬化面　19世紀
5		陶器	播鉢	－	11.8	－	－	底部平底	無釉 （土）精良　（色）10YR5/6 赤色～ 2.5YR4/2 灰赤色　やや不良	裏込め土中層内　17世紀
6		陶器	刷毛目碗	9.6	－	－	－	白化粧土後施釉	全面施釉　（土）精良 （色）外：5Y7/3 浅黄橙色～ 10YR4/2 灰黄褐色　内：5Y7/3 浅黄橙色　良好	肥前　裏込め土中層内　17世紀後半
7		陶器	灯火具	－	－	7.8（脚底）	－	脚底部糸切り 中空の脚	鉄釉　（土）精良 （色）外：10YR7/4 にぶい黄橙色 内：7.5YR4/3 褐色　堅緻	トレンチ南部硬化面

遺物番号	挿図番号	種 類	器 種	法 量（cm）				形態・技法等	石材	備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ g			
8	8		石臼	17.7	15.25	9.5	3.05	６分画	安山岩製	径：26cm　裏込め土上層

遺物番号	挿図番号	種 類	器 種	法 量（cm）			形態・技法・文様等	色調・調整・胎土・焼成等	備 考
				長さ	幅	厚さ			
9	8	瓦	軒桟瓦	－	－	1.9	菊花文　凸面に粗いハケメ	（土）4mm 以下の砂粒をわずかに含む （色）10YR7/3 にぶい黄橙色～黒色 やや甘い	撹乱内出土
10		瓦	軒桟瓦	－	－	1.6	末葉のみ残存	（土）3mm 以下の砂粒をわずかに含む （色）5Y4/1 灰色　硬質	撹乱内出土
11		瓦	軒桟瓦	－	－	1.9	末葉のみ残存　顎が細い	（土）2mm 以下の砂粒をわずかに含む （色）5Y6/1 灰色～黒色　硬質	撹乱内出土
12		瓦	丸瓦 （有段式）	－	－	1.6	凹面に紐状圧痕が残る	（土）5mm 以下の砂粒を含む （色）黒色　硬質	撹乱内出土 玉縁長さ3.3cm
13		瓦	丸瓦 （有段式）	－	－	1.9	凹面に縄目状圧痕	（土）2mm 以下の砂粒を含む （色）黒色　硬質	撹乱内出土
14		瓦	丸瓦 （有段式）	－	－	1.9	凹面にヘラ消し 凹面玉縁面に縄状圧痕	（土）2mm 以下の砂粒をわずかに含む （色）黒色　硬質	撹乱内出土
15		瓦	平桟瓦	30.3	－	2.0	凹面縦方向に紐状痕のようなものが残る 他はナデ　また（上）から 12cm 程の位置にかすかな段差	（土）5mm 以下の砂粒を含む いぶし良好　硬質	撹乱内出土
16		瓦	平桟瓦	30.9	－	2.1	ナデ仕上げ	（土）2mm 以下の砂粒を含む （色）黒色　硬質	裏込め土上層 下端面に刻印『助周池浦』
17		瓦	平桟瓦	－	－	2.0	ナデ仕上げ	（土）3mm 以下の砂粒を含む いぶし良好　硬質	撹乱内出土 下端面に刻印『助周池浦』
18		瓦	平瓦	－	－	1.9	凸面に粗いハケ	（土）3mm 以下の砂粒をわずかに含む （色）黒色　硬質	裏込め土上層
19		瓦	平桟瓦	29.5	－	1.9	凸面に細かいハケ（いろいろな方向）	（土）1mm 程の砂粒をわずかに含む （色）黒色　硬質	撹乱内出土　下端面に刻印『巻●』

第４章　松崎宿南構口の調査

（１）調査の概要

南構口は、北構口と比較すると石垣部・土塁部ともに遺構の残存状況が良好である。街道東側の石垣部に関しては、南辺の一部に南側に崩落する危険性があるものの、隅角部では基礎石から５段目まで残存しており、築造当時の様相をほぼ残した状態であると推定される。また、石垣からさらに東に延びる土塁部は、現在は削平を受けて全く残存していないが、聞き取り調査により昭和中期まで存在していたことが確認され、石垣部と宿場町を囲む竹藪とを結んでいたということであった。

街道西側の石垣部は全体的に改変が著しい。特に北辺は、ほとんどの石材が取り外されている状況で、やや残存状況が良い東辺・南辺石垣はともに崩落の危険性が高い。一方、土塁部は比較的良好に残存している。本来は南北４ヶ所いずれも存在していたであろう土塁のうち、唯一現存する箇所である。

今回の確認調査では、石垣部の残存状態が良く、逆に土塁部は残存していない街道東側は対象とせず、街道西側のみをその対象とした。調査方法は、石垣部１ヶ所・土塁部３ヶ所のトレンチ掘削による内容確認である。石垣部は、その内部構造の把握から、将来の整備に向けた構築方法の復原を目的とし、土塁部はその規模・構築方法の確認を目的とした。

（２）南構口の現状

●街道東側（第10図）

石垣部は、残存状況が非常に良好である。街道側両隅角部で基底部より５段（５石）残存しており、最上面の石列に一部改変が見られるものの、ほぼ構築時の状況を残しているものと考えられる。ただし、南辺中央部から南東隅角部にかけてはやや改変が大きく、後世に積み直された可能性がある。なお、今回の調査では石垣基底部まで確認できておらず、以下の数値は現状の路面を基準としたものであることを了承願いたい。

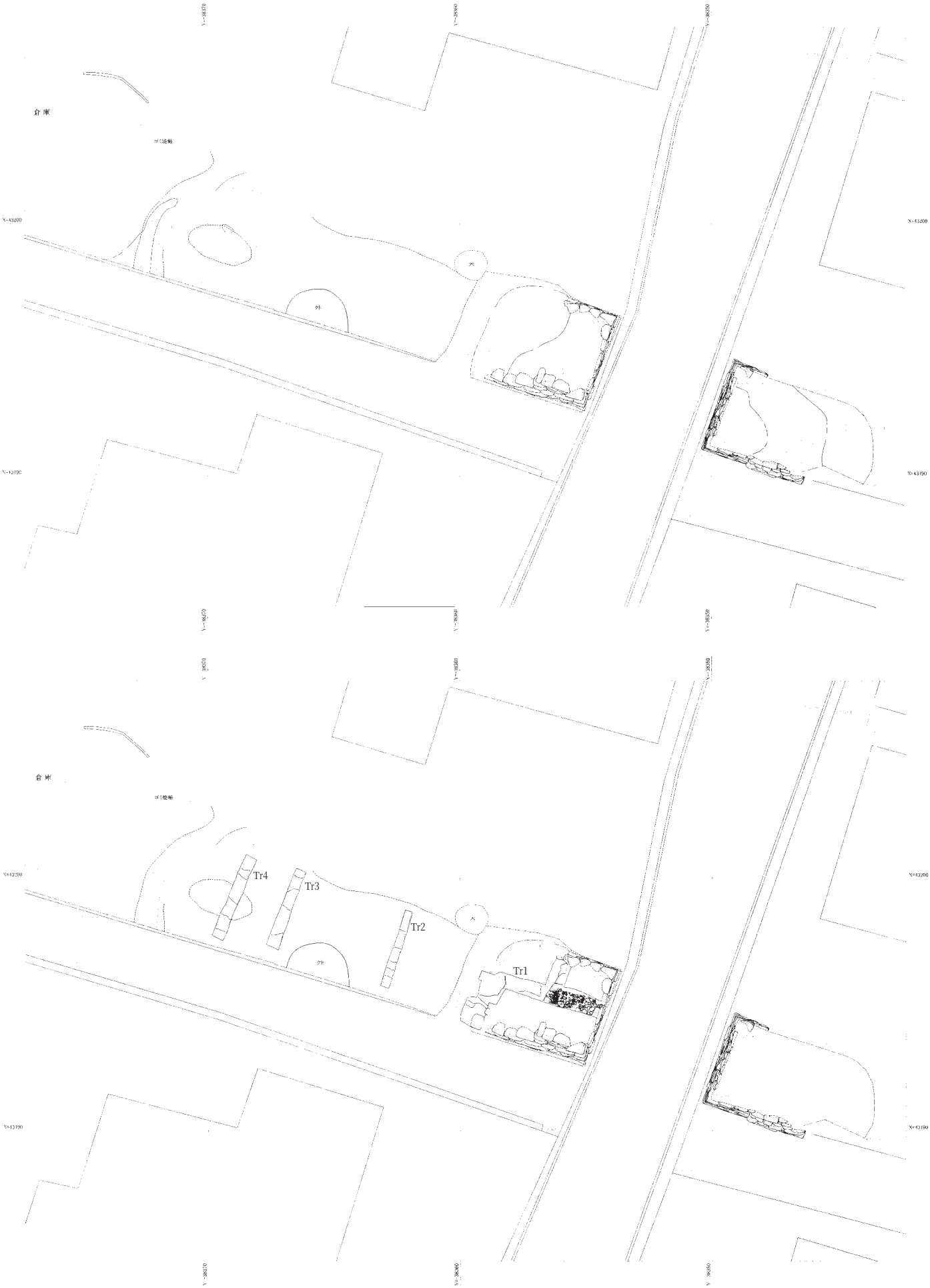
石垣部の規模は、基底部幅が街道沿い（西辺）3.77ｍ、南辺4.24ｍを測り、やや東西に長い長方形状を呈する。北辺の石垣は、北西隅角部から東に1.50ｍの範囲まで確認できる。高さは、街道沿い（西辺）の最高位が標高19.03ｍを測り、現在の路面からの比高差は1.92ｍである。南辺の最高位は標高19.05ｍで、比高差1.79ｍを測る。なお、江戸時代当時の路面は、現在の舗装路面より10～20cm程度下位に位置するものと考えられ、往時の比高差は最大で２ｍ以上あったものと推定される。

石垣に使用される石材は、基礎石及び隅角部の石に大型のものを使用し、その内側は目筋が通るよう大きさ等を選別して使用している。ただし、西辺と比較すると、南辺はやや積み方が荒く、その影響もあってか、中央部から東側はやや南に張り出している。積み直しの可能性を考慮する必要があろう。

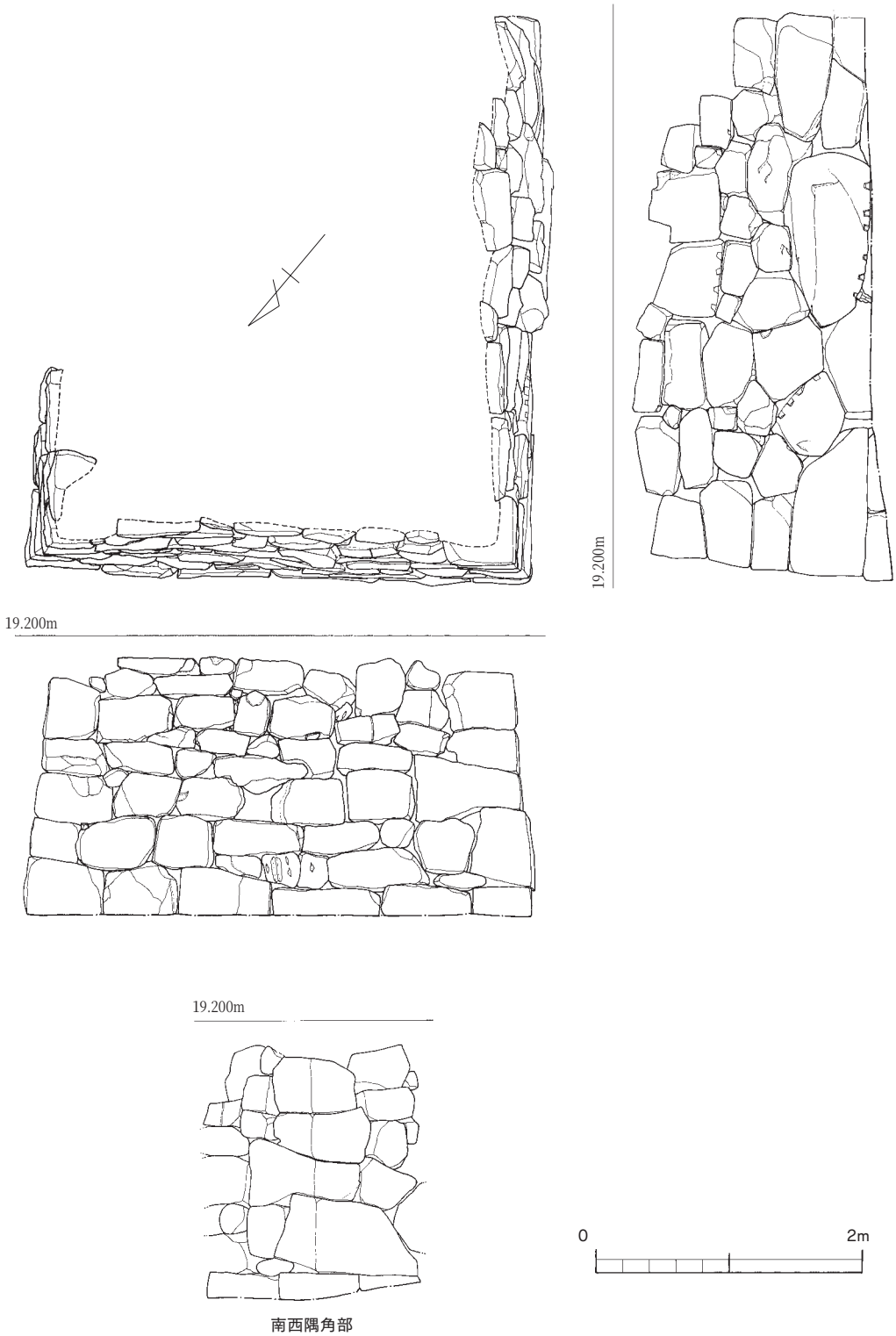
土塁部は現状では全く把握できない。往時には存在していた旨伝えられているが、著しく改変を受けている。なお、今後確認調査を実施すれば、土塁構築に伴う地山成形の痕跡等は十分確認される可能性があろう。

●街道西側（第11図）

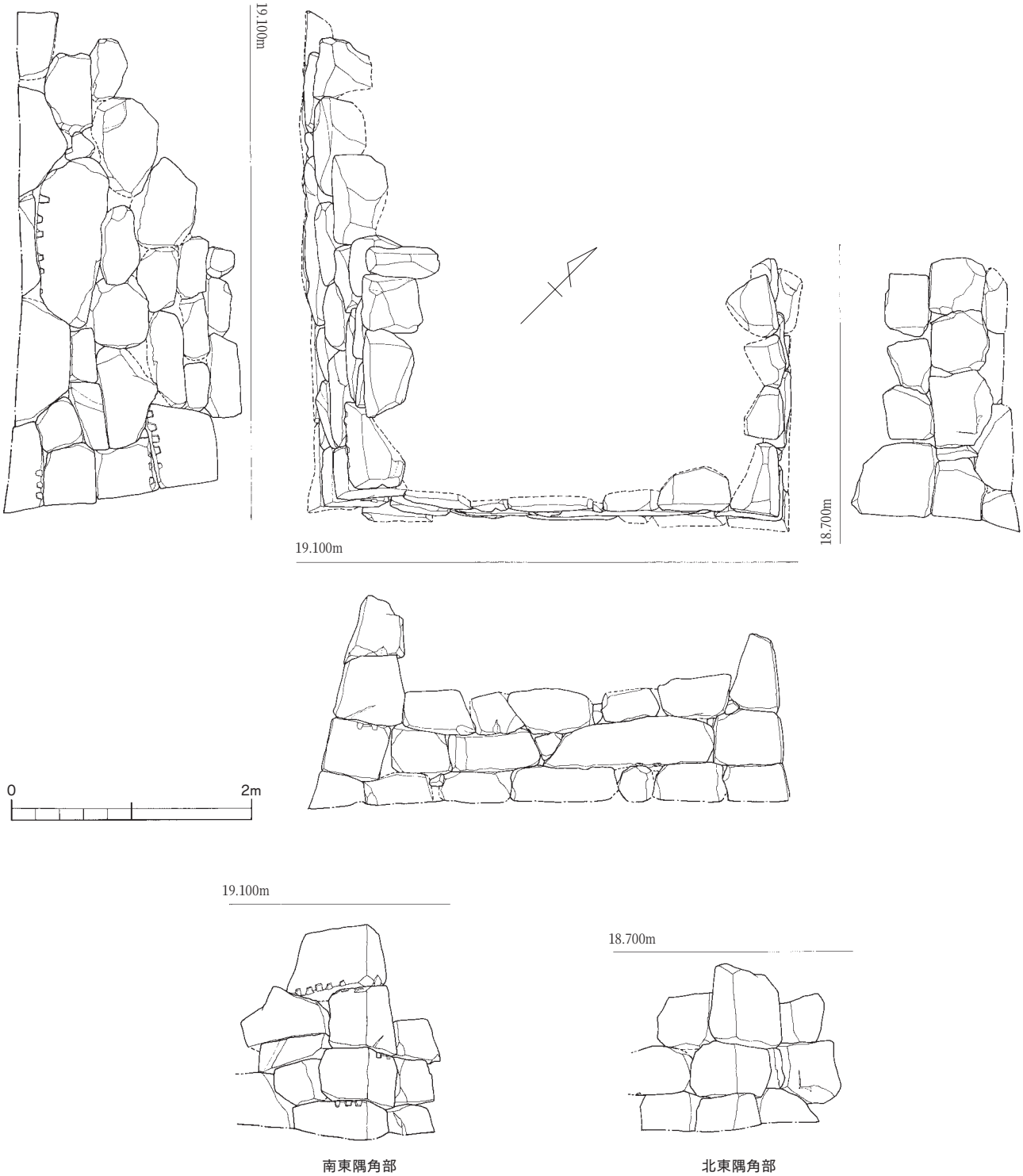
街道東側と比較して、石垣部の残存状況は悪い。比較的良好に見える南辺部も、少なくとも４段目以上は後世に積み直しが行われている。また、南西隅角部の基礎石と考えられていた大型の石も、今回の調査によって原位置を保っていないことが確認された。



第９図　南構口地形測量図（上）及びトレンチ配置図（下）（S=1/200）



第10図　南構口東側石垣実測図（S=1/50）



第11図　南構口西側石垣実測図（S=1/50）

石垣の規模は、現状の基底部幅で、街道沿い（東辺）4.00m、南辺4.18＋αmを測る。北辺は、北東隅角部から３石分1.66mのみ旧状を保っている。高さは、街道沿い（東辺）の最高位が標高18.83mを測り、現在の路面からの比高差は1.76mである。南辺部の最高位は標高19.02mで、比高差1.87mを測るが、先述のように標高約18.3m以上の部分は改変を受けている。なお、東側石垣と同様江戸時代当時の路面は、現在の舗装路面より10～20cm程度下位に位置するものと考えられ、往時を考慮すると比高差は、最大約２m程度まで現存しているものと推定される。

石垣に使用される石材は、基礎石及び隅角部の石に大型のものを使用している。また、東辺は街道沿いということもあってか、石の境目の筋が水平に通る整美な積み方が行われている。

土塁部は、比較的良好に残存している。最も残りが良い場所で頂部が標高約18.1mを測り、基底部の幅は約4.3mである。明瞭な高まりとして残存していない箇所に関しても、南北の路面より10～15cm程度の高さを残しており、当時の様相が想定可能である。現状で確認できるのは、石垣部から西に約18mまでの範囲だが、往時は宿場町を囲む竹藪まで延びていたと推定される。

（３）石垣部の調査（第12・13図、図版７～10）

西側石垣部の内容確認調査を実施するに当たり、主眼を置いたのは以下の点である。

① 石垣自体の東西規模を確認する。

② 石垣と土塁との取り付き部の様相を確認する。

③ 石垣の構築方法を確認する。

以上の①・②に関しては、石垣の西半部分が大幅に改変されていることが分かり、また期待された南西部隅角の基礎石も今回の調査で旧状を保っていないことが確認された。③に関しては、ある程度の想定が可能となる成果を得たので、この点を中心に述べてみたい。

トレンチは石垣の東西軸に合わせて設定した。なお、石垣西端及び南西隅角部の検出のため一部拡張したが、近代以降の瓦やガラス製品が数多く出土し、全体的に著しい攪乱を受けていた。東西軸に合わせて掘削したトレンチにおいても、中層以上（第13図第5層以上）は近代以降の攪乱により大きく壊されており、全体的に残存状況は悪い。

トレンチの最下部では、花崗岩質の地山を検出した。石垣のほぼ中心部の標高が最も高く（標高17.3m）、西側にはなだらかに傾斜し、最高部から約1.8mの地点で標高17.0mへと至る。これ以西は後世の攪乱により壊されている。石垣中心部のこの高まりはそのままなだらかに北側へと続き、石垣の基礎石設置用の掘り込みへと続く。

地山最高部から東側にかけては、土坑が掘削されている。この土坑は、現状で上端が東西1.3m以上、南北1.7m以上を測る。遺構の北側から見ると、上端からなだらかに南に傾斜し、石垣の中心から北側に約90cmの地点で垂直に下る。この垂直な壁面は西側にも続き、この掘り込みは現状で東西に長い長方形状を呈する。土坑の深さは、20cm以上を測る。土坑の埋土は、明黄褐色土と黒褐色土が互層状に堆積し（第13図第25～30層）、周辺の地山とほぼ同じ高さの面に礫敷き（第13図第23層）を行っている。この礫層に含まれる礫の大きさはバラエティに富むが、半数以上は５cm大の小型のもので、大きいものでは20cm近いものも存在する。なお、礫敷きの最西部には20cmを上回る大型の礫を据えている。この礫層の直上には均質な黒褐色土を10cm程度被せており（第13図第22層）、東辺の石垣に向かっては、更にその上にもう一度礫敷き（第13図第16層）が見られる。この礫層から上の数層は、

石垣部に向かって傾斜して堆積しており、石垣の裏込めを意識した盛土であろう。東辺石垣部から西へ平面上約70cmの範囲からは、花崗岩の礫（10～30cm大）が大量に検出された。石垣の構築に伴う裏込め石と考えられる。裏込め石自体の密度は高くはないが、この礫群が含まれる層（第13図第12・13層）は粘土質であり、この両者で石垣を支えていたものと考えられる。

以上のことから、石垣部の構築方法を推定すると以下のようになる。

①地山成形…現在の路面と石垣内部地山面の標高差から、地山を削って成形したことが想定される。

②土坑の掘削…深く掘り下げる面の平面形は、正方形に近い。

③土坑の埋め戻し・礫敷き（下層）…なお、この段階までに石垣部の基礎石を設置する。

④下層礫敷きを覆う…均質な黒褐色土で丁寧に埋める。

⑤東側石垣に向かってやや傾斜するように礫敷き（上層）…排水を意識したものか。

⑥上層礫敷きを覆う…均質な灰黒色土で丁寧に埋める。

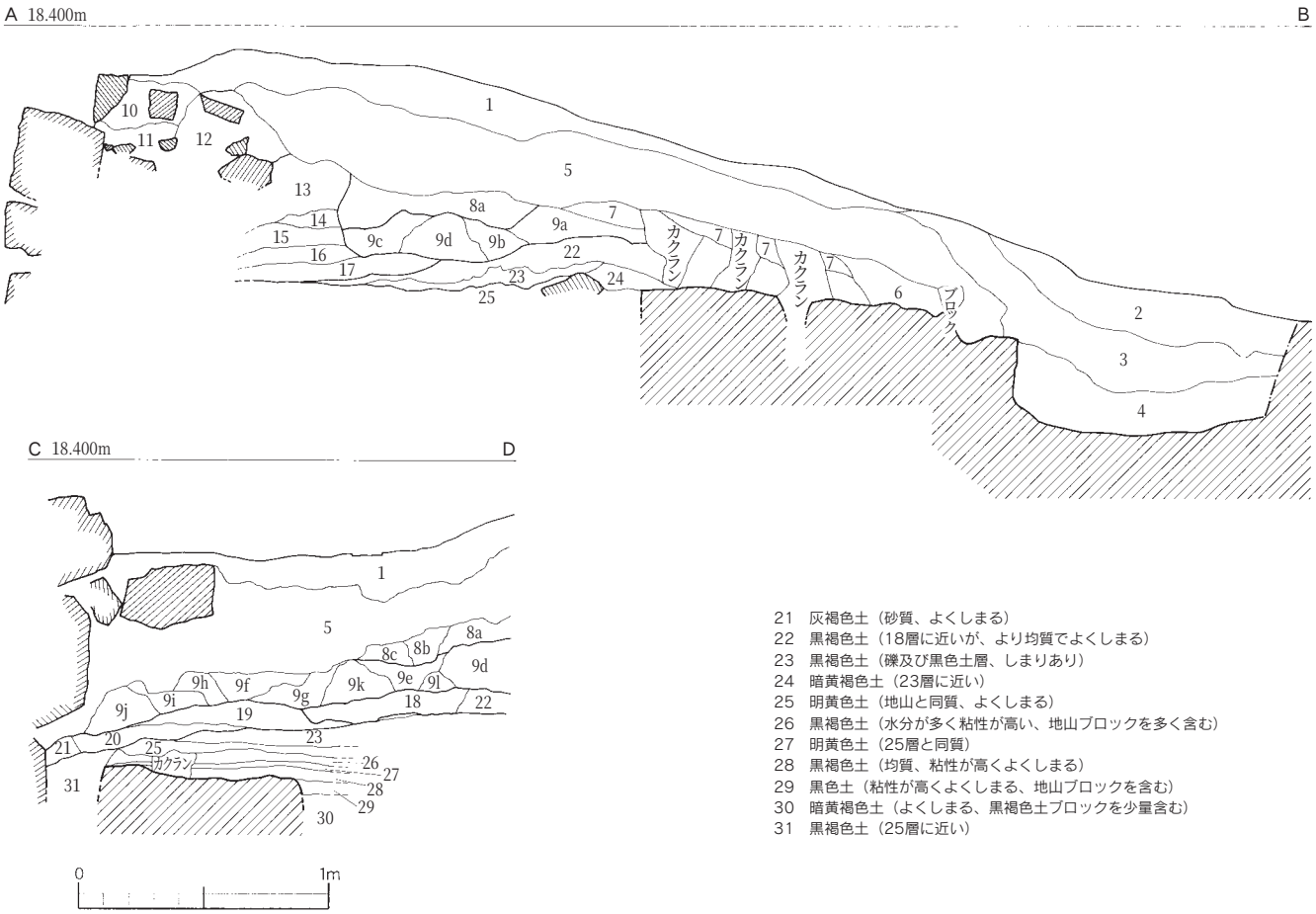
⑦石垣の裏込め石および粘土の充填…まず粘質土を積み、その上に大型の礫・地山質土を充填する。

⑧内部をブロック状の粘土で埋める…石垣内部を粘質土と砂質土でブロック状に充填する。

今回の調査では、完掘を行わなかったため、土坑の深さや裏込め石層の詳細に関しては不明であるが、当時の土木技術の一端を垣間見ることができた。この構築方法に関しては、将来の整備に向けて十分再検討し、生かしていく必要がある。

1　表土
2　暗茶褐色土（明橙色ブロックを多く含む）
3　灰茶褐色土（粘性が高い、炭化物を含む）
4　黒褐色土（瓦･陶磁器類を大量に含む、しまらない）
5　4層とほぼ同質
6　暗茶褐色土（砂質、あまりしまらない）
7　暗灰褐色土（粘性が高くしまりあり）
8a　灰褐色土（粘性が高い、5㎝大の粘土ブロックを多く含む）
8b　5層＋8a層＋8c層
8c　灰茶褐色土（8a層と同質）
9a　暗黄褐色土（やや粘性が高くよくしまる）
9b　灰茶褐色土（砂質でしまらない、均質）
9c　灰茶褐色土（やや粘性が高くしまる）
9d　茶褐色土（よくしまる、地山ブロック･粘土ブロックを含む）
9e　暗茶褐色土（よくしまる、2㎝大の地山ブロックを多く含む）
9f　暗茶褐色土（粘性が高いがしまらない）
9g　茶褐色土（しまりあり、3㎝大の灰白色粘土を含む）
9h　黒灰褐色土（均質、粘性が高くよくしまる）
9i　黄褐色土（粘性が高くよくしまる、1㎝大の粘土ブロックを多く含む）
9j　暗茶褐色土（粘性が高いがしまらない、礫を少量含む）
10　黒灰色土（新しい盛土）
11　暗黄褐色土（砂質、非常によくしまる）
12　明黄褐色土（非常によくしまる、地山ブロックを多く含む）
13　暗黄褐色土（非常に粘性が高い、灰色粘土ブロック･地山ブロックを多く含む）
14　13層＋15層
15　灰黒色土（均質、粘性が高くよくしまる、地山ブロックを少量含む）
16　黒灰色土（礫層、22層と同質、5㎜程度の明褐色土ブロックを大量に含む）
17　暗茶褐色土（よくしまる、礫は含まない）
18　黒灰褐色土（砂質、地山ブロック･礫を少量含む）
19　灰茶褐色土（粘性が高くよくしまる、灰色粘土ブロックを多く含む）
20　灰黄褐色土（19層に近い、礫を少量含む）

第12図　南構口Ｔｒ１実測図（S=1/30）



第13図　南構口Ｔｒ１土層断面実測図（S=1/30）

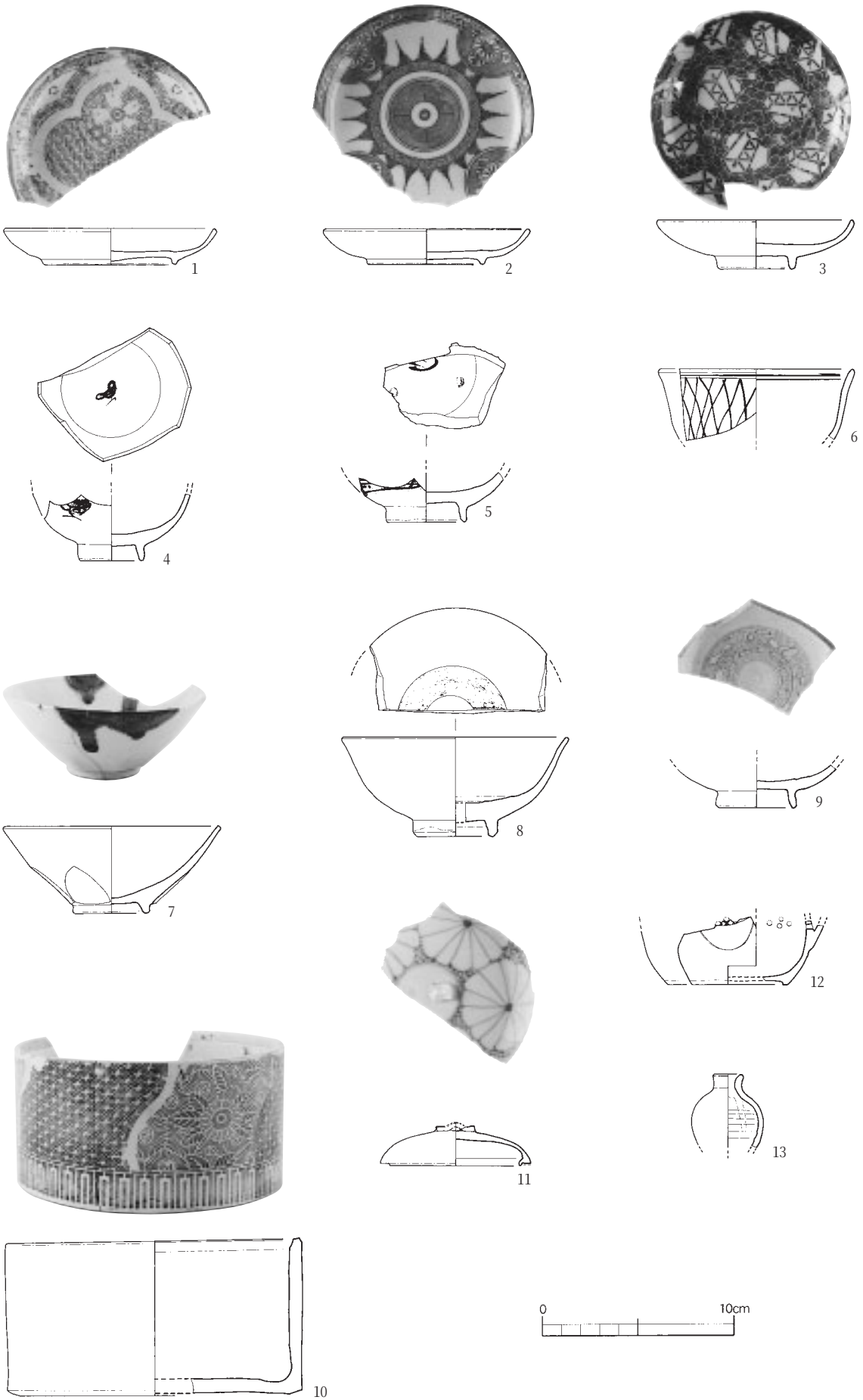
出土遺物（第14・15・20図、図版13）

出土遺物は、一部を除いてほとんどが上層（第13図第5層以上）から出土した。ただし、陶器片２点・平瓦片３点が下層の礫敷き層内より出土し、構築時期を考える大きな要素となる。

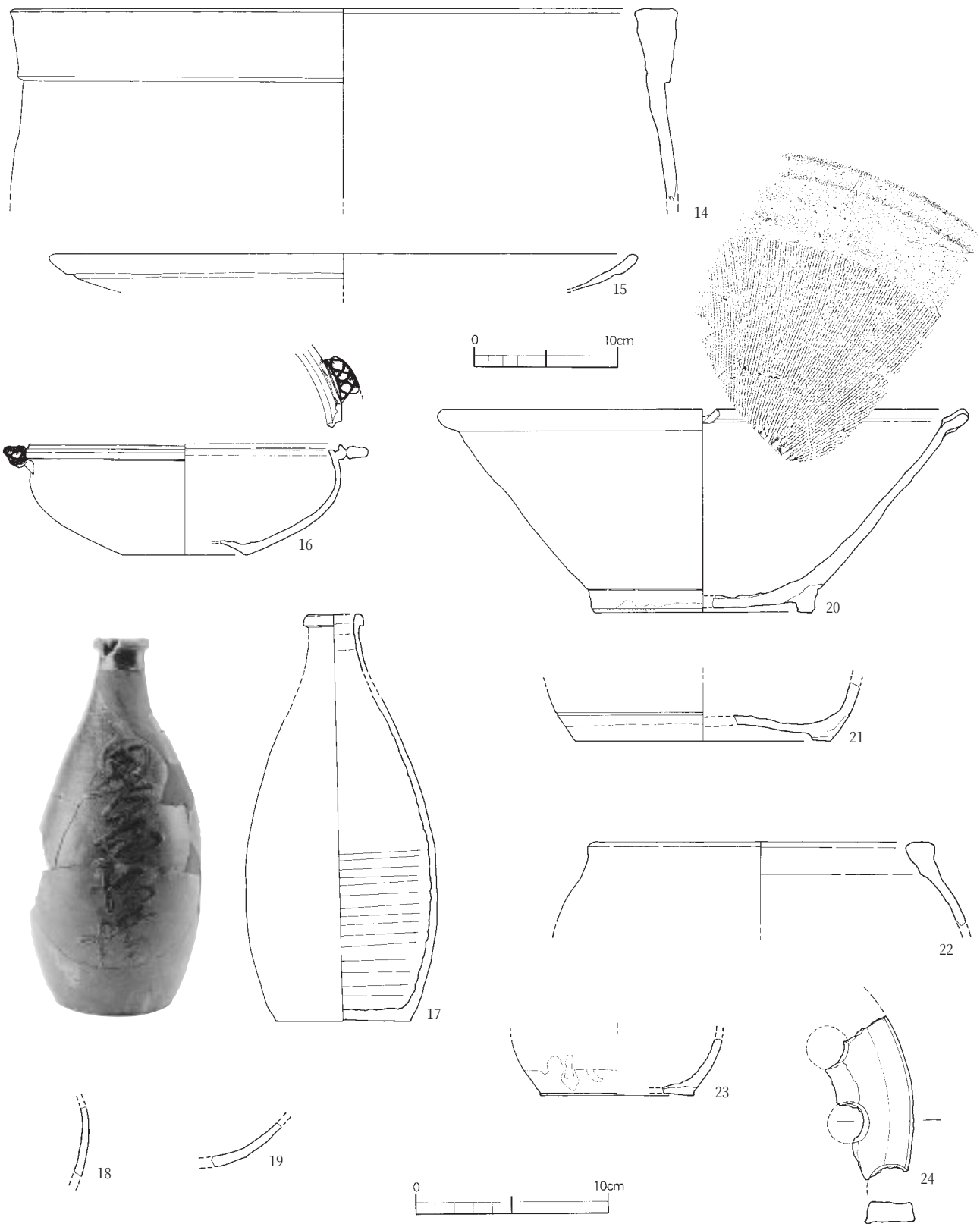
第14図1～3は染付の皿である。1・3は型紙摺り、2は銅版転写で、いずれも明治～大正にかけてのものである。3は見込みに足付きハマの溶着痕が残る。4～9は碗である。5は見込みに足付きハマの溶着痕が残る。1820～1860年。6は外面に網目文を施す。19世紀中頃のものと考えられる。8・9は、見込みに蛇の目釉剥ぎを行い、アルミナ砂を塗布している。いずれも肥前産で、1820～1860年。10は肥前産の染付段重である。型紙摺りで、明治～大正にかけてのものである。11は染付蓋で、外面は格子地に菊花散らしを施す。12は瀬戸・美濃系の水差で、明治～大正にかけてのものである。

第15図14は土師器の甕である。内面の付着物から、トイレの便槽として使用されたものと考えられる。16は陶器の鍋である。外面には煤が付着し、耳部には緑釉が施される。17は陶器の瓶である。外面に「魚屋酒場」などの字が描かれている。18は陶器の壺で、下層の礫敷き層内から出土した。肥前産で、18世紀前半以降のものと考えられる。19は陶器の皿である。18と同じく礫敷き層内から出土した。肥前産で、18世紀前半以降のものと考えられる。20は陶器の擂鉢である。口縁部を外反させ、一ヶ所注口を設ける。内面見込み及び外面高台に重ね焼きの痕跡が残る。22は土師質の火鉢の口縁部小片である。内面にススが付着している。24は土師質の七厘サナである。

第20図1～3は平瓦の小片で、いずれも下層の礫敷き層内から出土した。1は平瓦の端部で、狭端面と側面の２面が生きている。2・3は端部のみが生きている。いずれも胎土は非常に精良だが、内外面ともに磨耗しており、色調は灰色または暗灰色を呈する。



第14図　南構口Ｔｒ１出土磁器実測図（S=1/3）



第15図　南構口Ｔｒ１出土陶器・土師質土器等実測図（18・19・21～24はS=1/3、その他はS=1/4）

（4）土塁部の調査

土塁は、石垣から西側に向かって延びている。これは旧字図や地元の方の証言からも確認でき、石垣と宿場町を囲む竹薮との間を結んでいたものと考えられる。現状では、石垣から西に8～12.5mに位置する高まりが存在し、その内容確認を調査の主眼とした。なお、現状で平坦な面に関しても、わずかな盛土や地山成形等の痕跡が存在する可能性を考え、計３本のトレンチ調査を実施した。

●Ｔｒ２（第16図、図版11）

石垣部から約3.5m西側の平坦面に設定した。北側の路面からは比高差約15cmを測り、わずかながら土塁の高まりが残存していることが分かる。トレンチの南北長は約3.1mである。床面は全て花崗岩質の地山を検出したが、南側から約60cmを除き、全て後世の攪乱により壊されていた。なお、攪乱中より多くの近代瓦等が出土した。唯一残存する南部分の地山は、最高位で標高約16.9mを測る。やや南側に傾斜しており、旧状を保っている可能性があるが、検出範囲が狭く詳細は不明である。

出土遺物（第19図1）

第19図1は陶器の擂鉢である。見込みに重ね焼きの痕跡が残る。

●Ｔｒ３（第17図、図版11）

Ｔｒ２から約4.5m西側、石垣からは約8.5m西側に設定した。位置的には、現存する土塁の東側端部にあたる。トレンチの南北長は約3.3mである。トレンチ中央部やや北側を攪乱により壊されていたが、全体的に残存状況は良好である。トレンチ中央部床面の地山平坦面は、現地表から約20cm下位の標高約17.2mを測る。攪乱部を含め、南北幅約2.5mの平坦面が存在する。南側は、平坦面の端部からほぼ垂直に約50cm下降する。下降した下端の面は、確認した約40cmの範囲では、水平からやや南側に傾斜している。この垂直面及び水平面は自然のものとは考えられず、土塁構築時の基礎工事に伴うものであろう。なお、上部の平坦面も加工面である可能性が高いが、現地表から非常に浅く、確定はできない。

出土遺物（第19図2～7・第20図4、図版14）

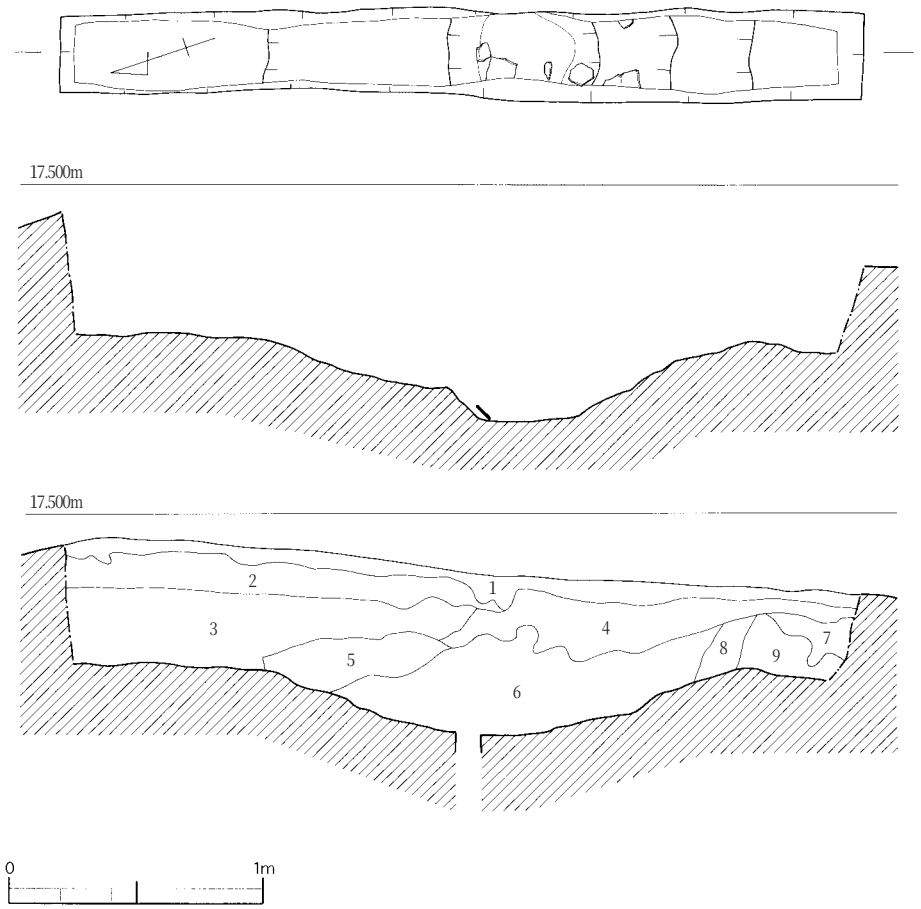
第19図2は陶器の擂鉢である。内面見込み及び外面高台に重ね焼きの痕跡が残る。3は染付碗で、19世紀のものと考えられる。4・5は染付の茶のみ碗である。4は肥前産で、1780～1810年。5は肥前産で、見込みにコンニャク印判の五弁花文を施す。6は染付の猪口で、肥前（有田）産と考えられる。1780～1840年。7は陶器の瓶で、笹葉文を施す。肥前産で、18世紀のものと考えられる。

第20図4は古銭で、「寛永通宝」である。

●Ｔｒ４（第18図、図版12）

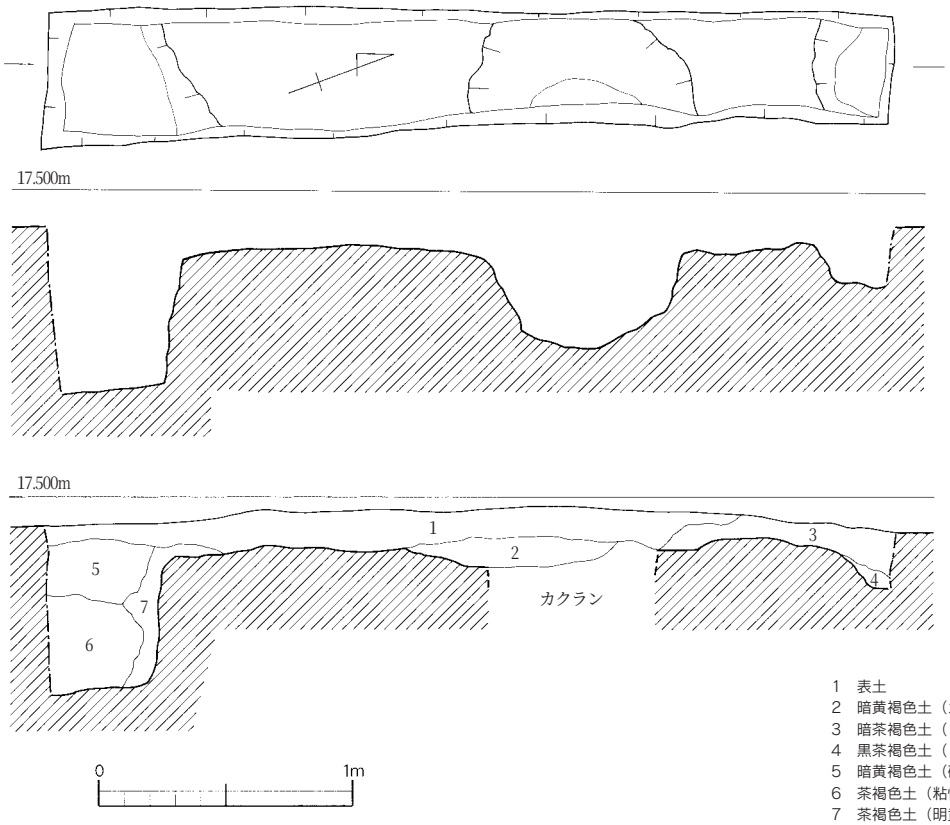
Ｔｒ３から約2m西側、石垣部からは約10.5m西側に設定した。位置的には、現存する土塁の中央部にあたる。土塁状の高まりは、現状で上端が東西2.6m、南北1.4mを測る。下端は、西側が排水溝等で攪乱を受けているものの、東西4.9m、南北4.0mを測る。最高部の高さは標高18.1mで、南北の路面との比高差約70cmを測る。

設定したトレンチの南北長は約3.5mである。他のトレンチと同様、床面はすべて花崗岩質の地山が検出された。床面の形状は、上部の平坦面、南北の段落ち部、段落ち部下位の平坦面から緩斜面にかけてに分けることができる。上部の平坦面は標高約17.3mで、トレンチ内での幅（南北間）は約1.7mを測る。意識的に整えられた平坦面である可能性が高い。北側の段落ち部は比高差50cmを測り、下部の平坦面の標高は約16.75mである。一方、南側の段落ち部は比高差45cmを測り、下部の平坦面



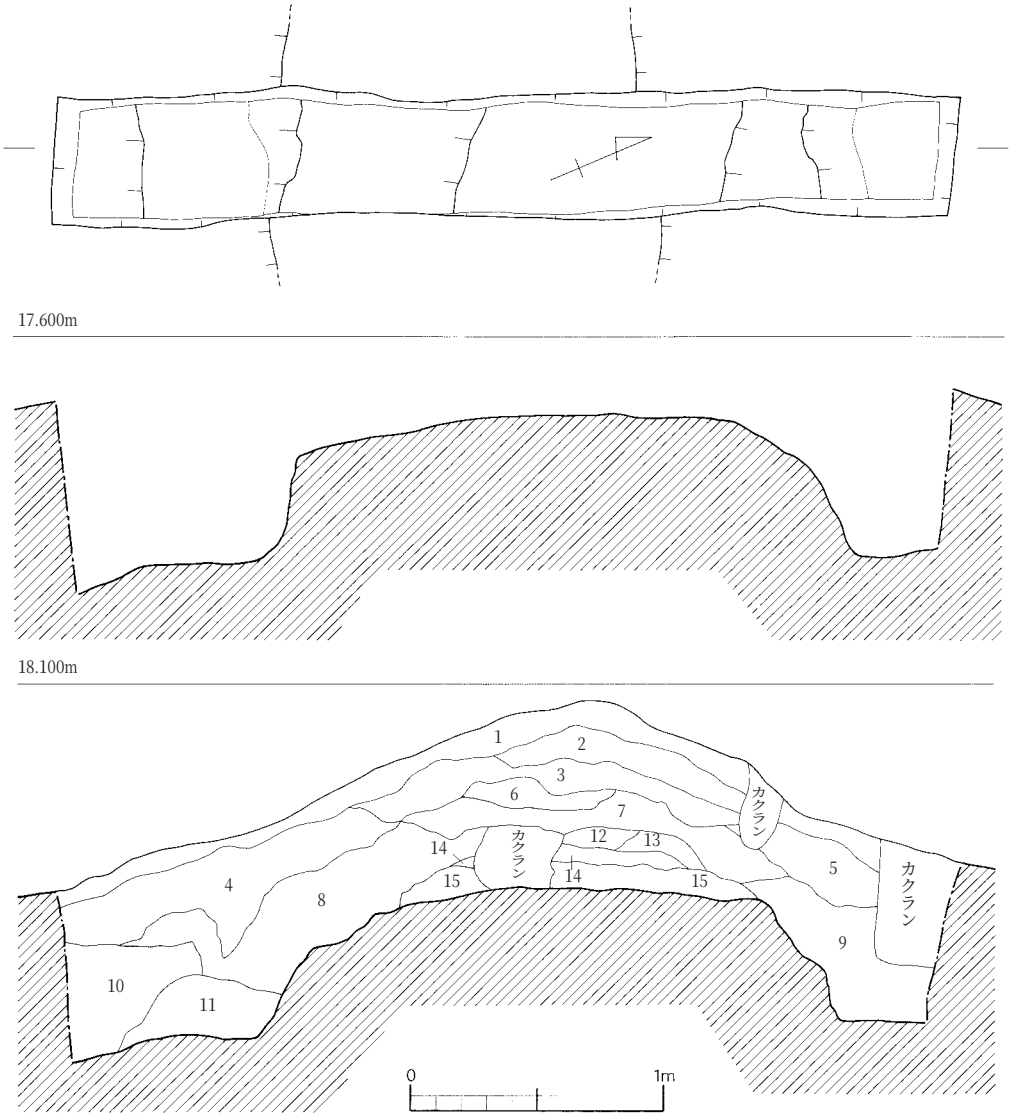
1　表土
2　盛土
3　黒灰色土（粘性が高いがしまらない、地山ブロックを多く含む）
4　暗茶褐色土（砂質でしまらない）
5　黄灰色土（3層と近い、地山ブロックを多く含む）
6　茶褐色土（粘性が高くよくしまる、瓦等を多く含む）
7　黒褐色土（砂質、木根が多い）
8　明黄色土（地山ブロックの層）
9　黄茶褐色土（砂質でしまりあり、地山ブロックを大量に含む）

第16図　南構口Ｔｒ２実測図（S=1/30）



1　表土
2　暗黄褐色土（カクランに伴う崩落層）
3　暗茶褐色土（しまらない、地山ブロックを多く含む）
4　黒茶褐色土（しまりあり、地山ブロックを含む）
5　暗黄褐色土（砂質、あまりしまらない）
6　茶褐色土（粘性が高くよくしまる）
7　茶褐色土（明黄色地山ブロックを多く含む）

第17図　南構口Ｔｒ３実測図（S=1/30）



1　表土
2　黒茶褐色土（砂質、しまりあり）
3　暗茶褐色土（しまらない、地山ブロックを大量に含む）
4　黒褐色土（砂質、木根が多くしまらない）
5　暗茶褐色土（やや粘性が高くよくしまる）
6　暗茶褐色土（砂質、よくしまる）
7　３層とほぼ同質
8　茶褐色土（砂質、よくしまる、瓦等を含む）
9　黒茶褐色土（粘性が高いがしまらない、地山ブロックを含む）
10　暗茶褐色土（砂質、よくしまる、陶磁器等を多く含む）
11　黄茶褐色土（砂質、しまりあり）
12　茶褐色土（均質な砂質土、暗橙色ブロックを少量含む）
13　暗茶褐色土（12層に近い、しまりあり）
14　黄茶褐色土（砂質、よくしまる、明橙色ブロックを多く含む）
15　暗茶褐色土（非常に均質な砂質土、地山ブロックを少量含む）

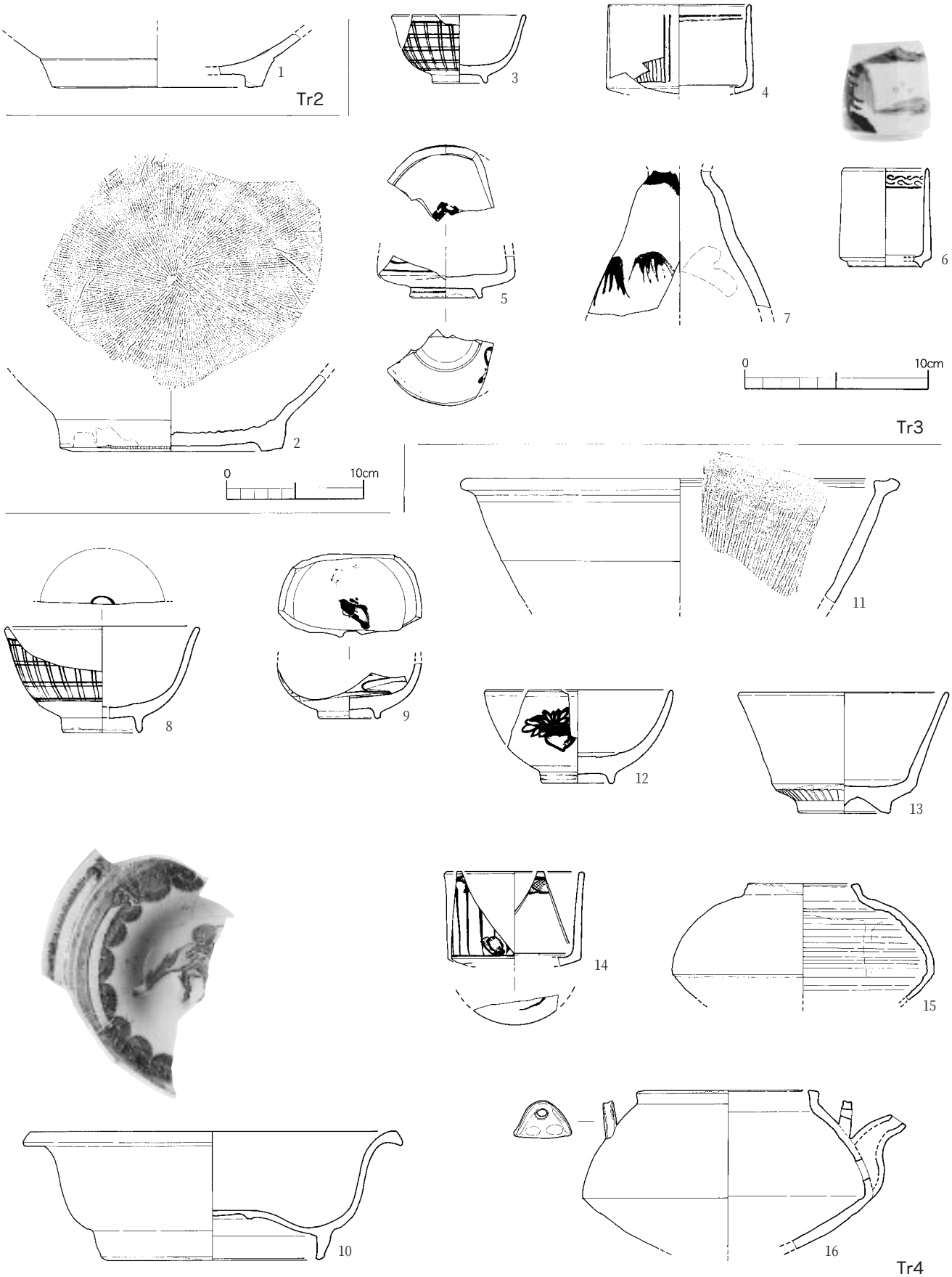
第18図　南構口Ｔｒ４実測図（S=1/30）

の標高は約16.7ｍである。なお、段落ち部の基底部幅は約2.3ｍである。南側段落ち下部の平坦面は約50cm南に延び、さらにそこから南側に緩やかに傾斜する。この変換点と南側段落ち上端部を結び、その線を延長すると、地山は全体的になだらかにつながることから、この段落ち部は土塁構築時の基礎工事の際に人為的に造られたものである可能性が高い。なお北側段落ち部は、緩斜面を検出するまでトレンチを延長できていないが、南側と同様の状況を呈するものと考えられる。

土塁の埋土は、第18図12～15層がよく締まった均質な層で、土塁構築の最初の段階で意識的に互層状に盛られた盛土と考えられる。これ以上の層は、盛土であることは間違いないと考えられるが、全体的に締まりがなく、かつ盛土方法が全く異なることから、①当初から基礎部分（第18図第12層以下）のみに丁寧な盛土を施し、それ以上はある程度まとめて一括で盛土された。または、②時間の経過とともに当初の盛土の崩落が著しくなり、ある段階で（整形を行った後に）盛り直されたという２案が考えられる。いずれにせよ、土塁部はその後に大きく攪乱・削平を受けており、今回わずかではあるが、当初の盛土方法が確認できたことは大きな成果であろう。

出土遺物（第19図8～16・第20図5、図版14）

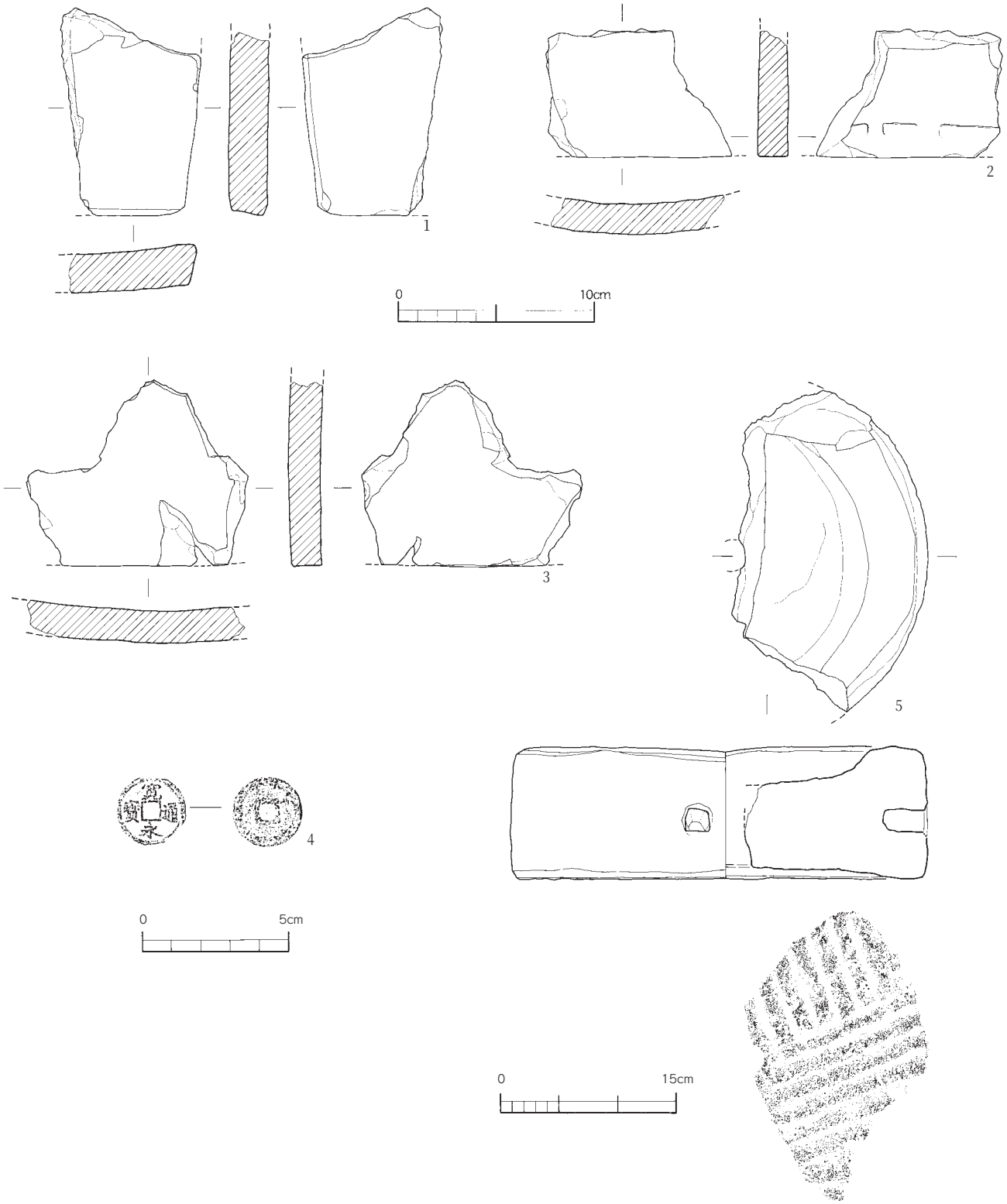
第19図8は染付碗で、二重格子文を施す。19世紀中頃のものと考えられる。9は肥前産の茶のみ碗である。1820～1860年。10は染付鉢で、肥前（塩田）産である。型紙摺りで明治～大正にかけての



第19図　南構口Ｔｒ２～Ｔｒ４出土遺物実測図（1・2・11・15・16はS=1/4、その他はS=1/3）

ものである。12は碗で、外面にコンニャク印判の蕪を施す。13は陶器の鉢で肥前産、18世紀のものである。15・16は陶器の鍋である。16は底部外面に大量のススが付着している。

第20図5は玄武岩製の石臼である。トレンチ北端の攪乱坑より出土した。



第20図　南構口出土瓦・古銭・石臼実測図（1～3はS=1/3、４はS=1/2、5はS=1/5）

表２　松崎宿南構口 出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm）				形態・技法・文様等	色調・調整・胎土・焼成等	備考
				口径	底径	器高	高台高			
14	1	磁器	染付皿	11.1	6.8	1.9	0.4	(内) 型紙摺り	(土) 精良 (色) 灰白色	肥前or瀬戸 明治～大正
	2	磁器	染付皿	10.8	6.0	1.9	0.3	(内) 銅版転写	(土) 精良 (色) 外：灰白色	福岡？ 明治～大正
	3	磁器	染付皿	10.3	4.0	2.6	0.7	(内) 型紙摺り (見込) 足付ハマ溶着痕	(土) 精良 (色) 外：灰白色	肥前or美濃 明治～大正
	4	磁器	染付碗	－	3.4	－	0.8	(外) (見込) 梅花文	(土) 精良 (色) 明青灰色	
	5	磁器	染付碗	－	4.2	－	1.0	(見込) 足付ハマ溶着痕	(土) 精良 (色) 灰白色	1820～1860
	6	磁器	染付碗	10.2	－	－	－	(外) 網目文	(土) 精良 (色) 明青灰色	19ｃ
	7	磁器	碗	11.4	4.0	4.6	0.6		(土) 精良 (色) 灰白色	
	8	磁器	碗	11.8	4.4	5.2	0.8	(見込) 蛇の目釉剥ぎ、アルミナ砂塗布 (外) 鉄釉	(土) 精良 (色) 外：明黄褐色 内：灰白色	肥前 1820～1860
	9	磁器	染付碗	－	4.2	－	0.9	(見込) 蛇の目釉剥ぎ、アルミナ砂塗布 (外) 型紙摺り	(土) 精良 (色) 外：白色 内：灰白色	肥前 明治～大正
	10	磁器	染付段重	15.5	15.4	8.0	－	(外) 型紙摺り	(土) 精良	肥前 明治～大正
	11	磁器	染付蓋	7.8	－	(2.2)	－	(外) 菊花文 熨斗形つまみ	(土) 精良 (色) 明青灰色	肥前 18c後
	12	磁器	水指	－	6.2	－	－		(土) 精良 (色) 白色	瀬戸・美濃系 明治～大正
	13	磁器	小壺	1.6	胴部 3.8	－	－		(土) 精良 (色) 外：暗青灰色 内：灰白色	
15	14	土師器	甕	46.5	－	－	－	(内) 付着物あり	(調) ナデ (土) 1mm以下の砂粒を含む (色) 外：橙色 内：にぶい黄橙色	
	15	土師質	鍋	41.0	－	－	－	(外) スス付着	(調) ナデ (土) 1mm以下の砂粒を含む (色) 外：黒褐色 内：橙色	
	16	陶器	鍋	22.4	8.6	7.7	－	(耳) 緑釉 (外) スス付着	(土) 精良 (色) 外：黄灰色 内：橙色	
	17	陶器	瓶	4.1	9.4	28.3	－	(外)「魚屋酒場」の文字	(土) 精良 (色) 外：灰黄褐色～にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色 外底：にぶい褐色	
	18	陶器	瓶	－	－	－	－		(土) 精良 (色) 外：灰黄褐色 内：明褐色	肥前 18c前
	19	陶器	皿	－	－	－	－		(土) 精良 (色) 黄褐色	肥前 18c前
	20	陶器	擂鉢	37.0	15.6	14.2	0.7	(内) (高台) 重ね焼き痕	(土) 1～4mmの粗い砂粒を含む (色) 極暗赤褐色	
	21	陶器	鉢	－	18.0	－	0.5	(内) 重ね焼き痕	(土) 1～2mmの粗い砂粒を多く含む (色) 外：暗褐色～灰黄褐色内：灰黄褐色～赤灰色	
	22	土師質	火鉢	18.0	－	－	－	(内) スス付着	(土) 1mmの砂粒を含む (色) 外：にぶい橙色 内：黒褐色	
	23	陶器	鉢	－	8.0	－	－		(土) 精良 (色) 外：褐色～にぶい褐色 内：褐色	
	24	土師質	七厘のサナ	復元径 20.6	復元孔径 2.2	－	－		(土) 1mm以下の砂粒を含む (色) 外：橙色 内：橙色	
19	1	陶器	擂鉢	－	15.4	－	0.9	(内) 重ね焼き痕	(土) 細砂粒を含む (色) 外：赤灰色～灰赤色 内：灰白色	
	2	陶器	擂鉢	－	16.3	－	0.6	(内) (高台) 重ね焼き痕	(土) 精良 (色) 暗赤褐色	
	3	磁器	染付碗	7.3	2.8	3.7	0.4	(外) 二重格子文	(土) 精良 (色) 灰白色	19c中
	4	磁器	染付 茶のみ碗	7.8	－	－	－		(土) 精良 (色) 明青灰色	肥前 1780～1810
	5	磁器	染付 茶のみ碗	－	4.0	－	0.5	(見込) 五弁花文	(土) 精良 (色) 明緑灰色	肥前 見込にコンニャク印判
	6	磁器	染付猪口	4.8	4.0	5.4	0.3	(外) 山水画文	(土) 精良 (色) 明青灰色	肥前（有田） 1780～1840
	7	陶器	瓶	－	－	－	－	(外) 笹葉文	(土) 精良 (色) 外：浅黄色 内：にぶい黄褐色	肥前 18c
	8	磁器	染付碗	10.6	4.2	5.8	0.9	(見込) 円文 (外) 二重格子文	(土) 細砂粒を含むが精良 (色) 明青灰色	19ｃ中
	9	磁器	染付 茶のみ碗	－	3.2	－	0.5	(外) 風景文	(土) 精良 (色) 灰白色	肥前 1820～1860
	10	磁器	染付鉢	20.6	12.2	7.0	1.3	(内) 型紙摺り（獅子）	(土) 精良 (色) 明青灰色	肥前(塩田) 明治～大正
	11	陶器	擂鉢	32.0	－	－	－		(土) 1～2mmの砂粒を僅かに含む (色) 外：暗赤褐色 内：褐色	
	12	磁器	染付碗	10.3	3.8	5.1	0.5	(外) 野菜［蕪］文	(土) 精緻 (色) 灰白色	肥前 18ｃ前～中 外面にコンニャク印判
	13	陶器	鉢	11.4	6.6	5.0	0.9	(見込) 足付ハマ溶着痕	(土) 粗い砂粒を含む (色) 外：浅黄色 内：明黄褐色	肥前 18ｃ
	14	磁器	染付 茶のみ碗	7.6	－	－	－		(土) 精良 (色) 灰白色	肥前 1780～1810
	15	陶器	土瓶	8.0	胴径 19.2	－	－	(外) 鉄釉	(土) 精良 (色) 外：黄褐色 内：黄褐色～暗赤褐色	
	16	陶器	土瓶	13.3	胴径 21.2	－	－	(底) 多量の炭化物付着	(土) 細砂粒を含む (色) 暗オリーブ（緑系）	

第５章　調査の成果

（１）北構口

【北構口の規模について】

今回調査を行った南側石垣の現状規模は街道に面する部分（北辺）で4.3m、東辺は2.22m、西辺は1.7m、高さ1.24mである。「石垣基底部確認調査」により、現地表面以下約30cmが当時の地表面と考えられるので、それを考慮すれば1.54m以上の高さがあったことになる。

まず、石垣の高さであるが、現状の北構口は現地表面から４段の石列が確認できる。北構口の北側石垣の東面石垣南端の法面が若干合わないことや、南構口では５段の石垣が確認されていることを考慮すると上段石列は抜き取られている可能性が高い。あと１段の石列が存在したとすれば、当時の高さが1.84～1.94mになり、あと２段の石列が存在したとすると2.14～2.34mの高さが存在したことになる。

根石部分を含めて高さを考えると、あと１段あれば平面の一辺とほぼ同規模に、根石を含めずに考えると２段で同規模になる。

奥行きに関しては、「石垣内部構造確認調査」トレンチの南端部で旧表土が一部残り、それを切りこむ形で土坑、もしくは溝状の掘り込みが確認できる。トレンチ拡張の限界があったために、推測の域を出ないが、これを根石設置の際の掘り込みと考えるならば、石垣北辺から約2.3mで根石が設置されたことになり、石垣平面規模は約2.3m四方（約２間）となる。

【北構口の構築時期】

北構口の構築時期は、石垣裏込め土の中層内出土の陶磁器から17世紀後半と考えられる。第２章で述べているように、松崎宿の成立と同時期と考えられる。

ただ、上層の裏込め土やトレンチ南端の硬化面出土の陶磁器類や瓦類の所属時期はそれよりも新しく19世紀に入るものもみられるので、その時期に北構口の石垣上段、および南側石垣の南辺の石列が抜かれたり、裏込め土の再構築など、北構口の大きな改変が行われている可能性を示唆する。

（２）南構口

【南構口の構築時期とその後の修復の可能性】

第２章で述べたように、松崎宿の成立は、寛文８年(1669)に有馬豊範が御原郡35ヶ村の内19ヶ村１万石（松崎藩）を分知されたことによる。その後、延宝６年(1678)には、松崎宿を通る薩摩街道が天下道として定められ、宿場の重要性も増すことになる。松崎宿の場合、宿場町自体が松崎藩誕生に合わせて新規に整備されたものなので（以前に村が存在していたとしても）、町割り等その際に決定された可能性が高い。よって南北の構口の構築時期も、その際と考えるのが最も妥当であろう。

今回の石垣部内部の調査成果で最も重要なのは、石垣構築の第一段階に造られた土坑及び礫敷き遺構が確認されたことである。構口が内部から崩壊するのを防ぐための排水機能を携えているものと考えられるが、その礫層中から陶器片２点及び瓦片３点が出土した。これらはいずれも石垣構築時に混入したものと考えて間違いない。瓦は小片で時期比定が難しいが、陶器片は小片ながらいずれも18世紀前半以降のものと考えられる。小片故若干時期が遡る可能性はあるが、現存する南構口の石垣が、宿成立の17世紀後半ではなく、18世紀に入ってから構築（または改築）された可能性も考えられる。また、その他の出土遺物の中にも、17世紀に遡るものが存在しないことは興味深い。

土塁の構築方法は、地山整形の後に盛土を施したことが確認された。ただし、この盛土は大きく２種類に分けることができる。バイラン土ブロックを含んだ均質な層（下層）と、しまりのない一括盛土されたと考えられる層（上層）である。前者の層中からは遺物の出土がなかったが、後者の層中からは明治期以降の遺物も出土した。盛土の性質の違い及び出土遺物の時期差から考えて、現存する盛土上層は築造当初そのままのものではない可能性が高いと考えられる。

図版１（北構口）

①石垣内部検出状況（西から）

②石垣内部断ち割り状況（南から）

図版２（北構口）

①石垣東面基底部北（東から）

②石垣東面基底部南（東から）

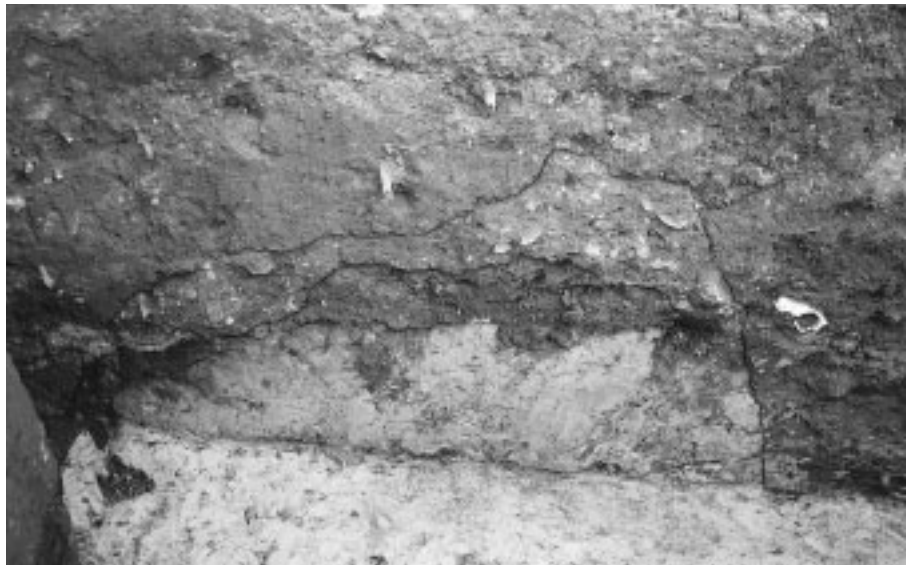
③石垣西面基底部（北西から）

④石垣西面基底部詳細（北西から）

①石垣内部検出状況（西から）

②石垣内部断割土層断面（東から）

③石垣内部断ち割り土層断面詳細①（東から）



④石垣内部断ち割り土層断面詳細②（東から）

図版３（北構口）

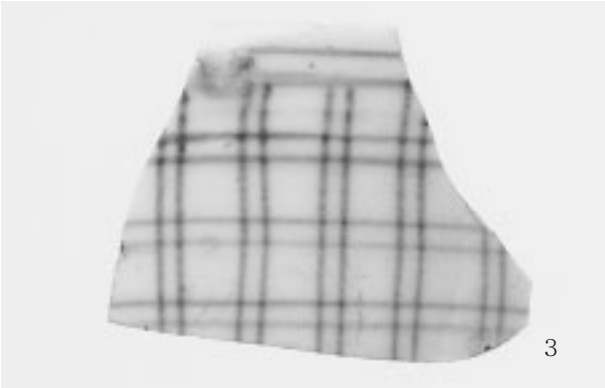
図版４（北構口）

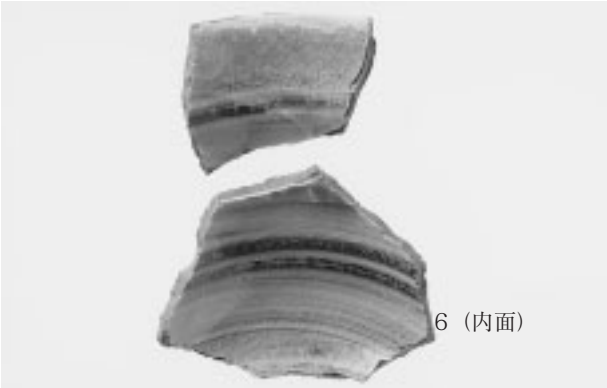
①石垣内部盛土状況①（南東から）

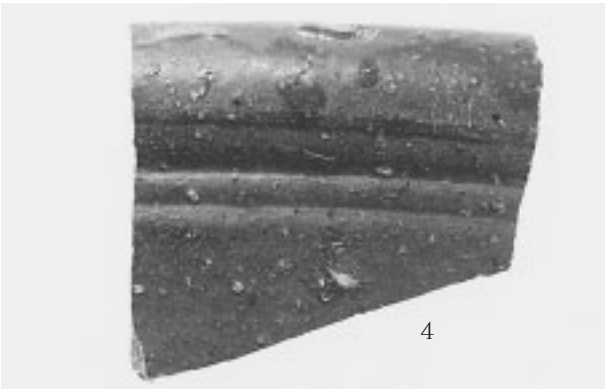
②石垣内部盛土状況②（南から）

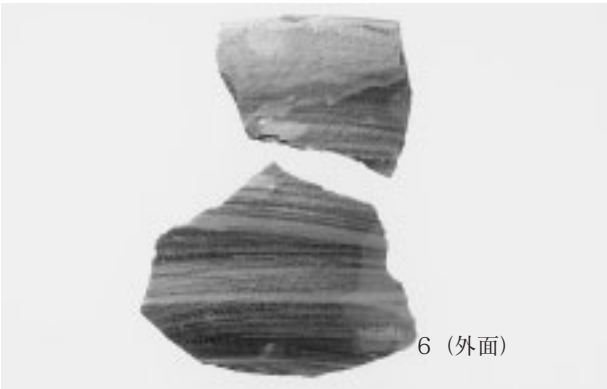
③現地説明会風景①

④現地説明会風景②









北構口出土遺物①（番号は第８図と対応）

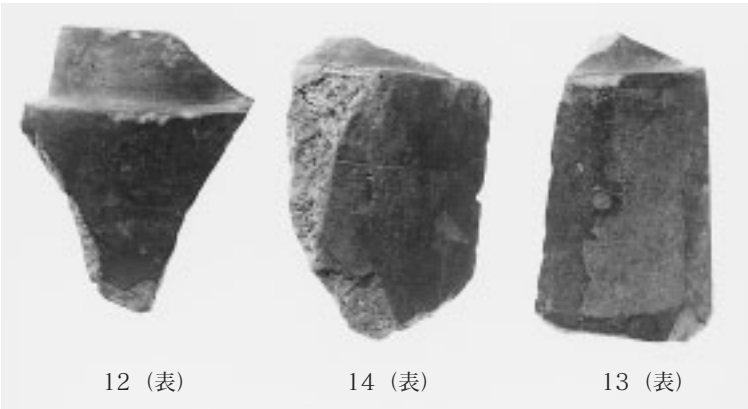
図版６（北構口）

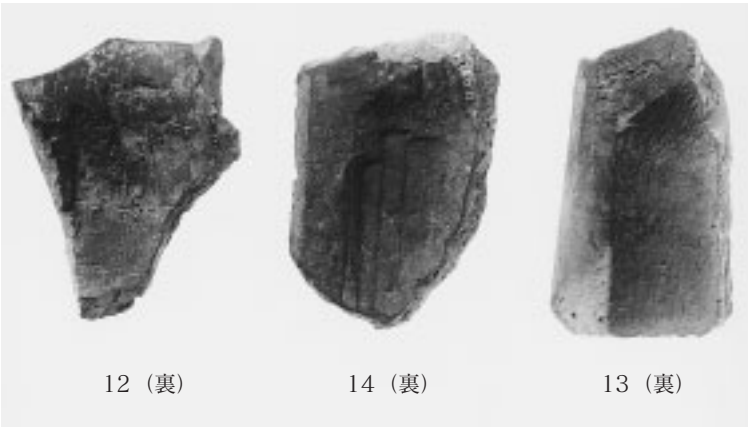
11

9

10

15


12（表）　14（表）　13（表）


12（裏）　14（裏）　13（裏）

15詳細

北構口出土遺物②（番号は第８図と対応）

①構口（街道西側）全景（北西から）

②石垣内部完掘状況（西から）

図版８（南構口）

①構口（街道西側）石垣現状（南から）

②構口（街道西側）全景（北東から）

③構口（街道西側）全景（西から）

④完掘状況（北東から）

①Ｔｒ１上層瓦類出土状況（西から）

②Ｔｒ１完掘状況（西から）

③Ｔｒ１南壁土層堆積状況１（北から）

④Ｔｒ１南壁土層堆積状況２（北から）

図版９（南構口）

図版１０（南構口）

①Ｔｒ１東壁土層堆積状況（西から）

②Ｔｒ１石敷き層・裏込石等検出状況（北から）

③Ｔｒ１石垣部基礎石掘り方検出状況（南西から）

④Ｔｒ１石垣南西端部確認状況（南西から）

①Ｔｒ２完掘状況（南から）

②Ｔｒ２土層堆積状況（南から）

③Ｔｒ３完掘状況（南から）

④Ｔｒ３南側段落ち部検出状況（南東から）

図版１１（南構口）

図版12（南構口）

①Ｔｒ４完掘状況（南から）

②Ｔｒ４土層堆積状況（東から）

③Ｔｒ４土層堆積状況（北東から）

④Ｔｒ４土層堆積状況（南東から）

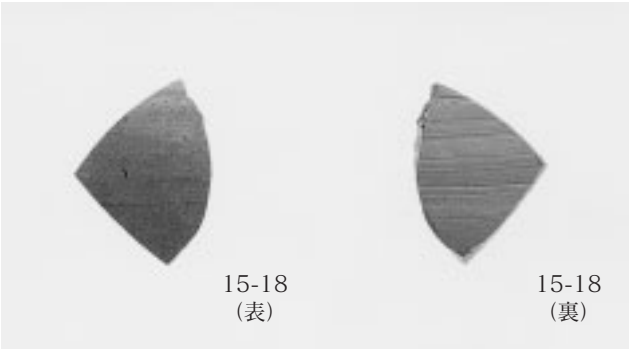
15-14

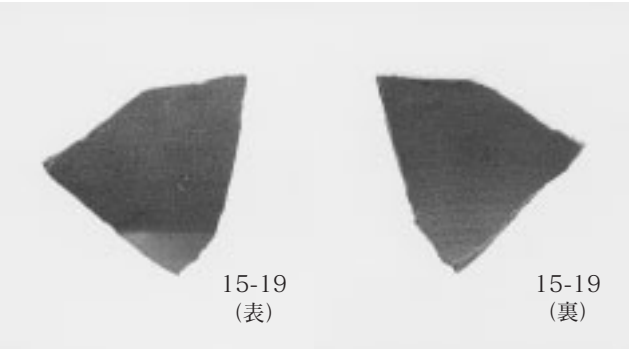
15-16

15-20
（外）

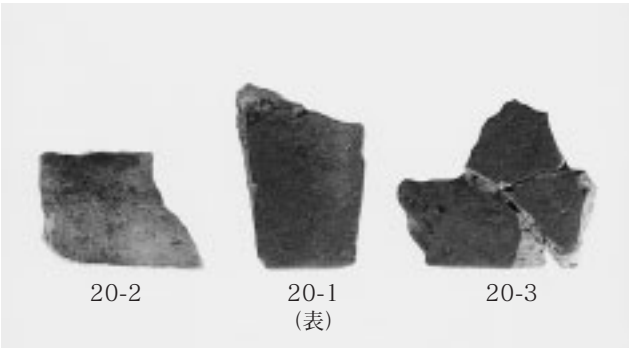
15-20
（内）

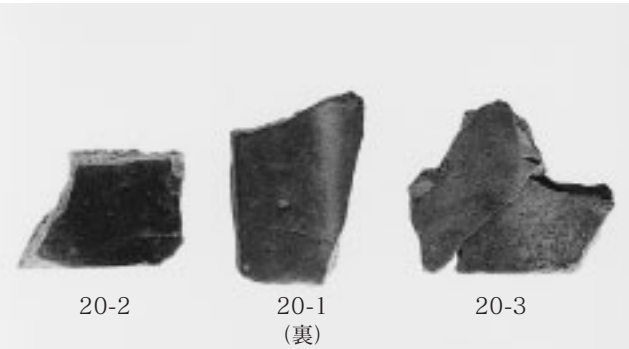
Ｔｒ１出土土師器・陶器


15-18
（表）
15-18
（裏）


15-19
（表）
15-19
（裏）

Ｔｒ１礫敷き遺構内出土陶器


20-2
20-1
（表）
20-3


20-2
20-1
（裏）
20-3

Ｔｒ１礫敷き遺構内出土瓦

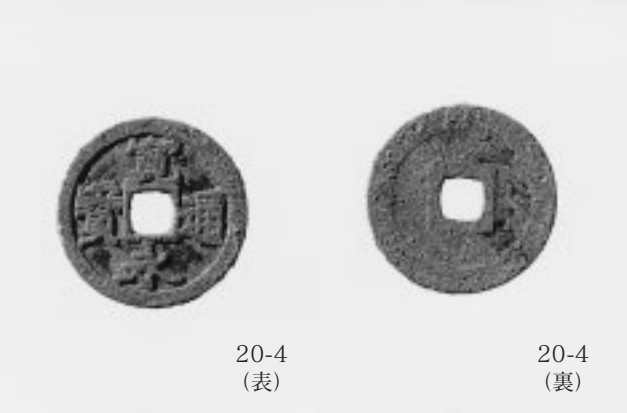
南構口出土遺物①

図版14（南構口）

19-13

20-5

19-10


20-4
（表）

20-4
（裏）

Ｔｒ４　出土遺物

Ｔｒ１　石敷き遺構内瓦出土状況

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつざきしゅくきたかまえぐち・みなみかまえぐち
書名	松崎宿北構口・南構口
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第218集
編集者名	山崎頼人　杉本岳史
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838-0198　福岡県小郡市小郡255-1　☎0942-72-2111
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつざきしゅくきたかまえぐち 松崎宿北構口	福岡県 小郡市 松崎	40216		33° 23′ 39″	130° 35′ 20″	2003.9.3 ～ 2003.9.30	10㎡	内容確認
まつざきしゅくみなみかまえぐち 松崎宿南構口	福岡県 小郡市 松崎	40216		33° 23′ 19″	130° 35′ 15″	2005.10.11 ～ 2006.10.18	34㎡	内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松崎宿北構口	史跡	江戸時代	石塁	陶磁器 瓦 石製品	南北の構口（計４基）が現存する貴重な例、今後構口調査の指針となる調査
松崎宿南構口	史跡	江戸時代	石塁 土塁	陶磁器 瓦 石製品	

松崎宿北構口・南構口

―福岡県小郡市松崎所在構口の調査報告書―

小郡市文化財調査報告書第218集

平成19年3月31日

発　行　小郡市教育委員会
小郡市小郡255-1

印　刷　株式会社　三　光
福岡県福岡市博多区山王１丁目14-4